

鹿屋体育大学における2014年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察
－体験学習モデルに基づくアクティブ・ラーニング型授業における
実践的指導力育成システムの構築に向けて－

佐藤 豊¹⁾, 梶ちか子¹⁾

**Case study reports and reflection of Health and Physical Education
Teacher Education IV (2014) in NIFS**

— For construction of practical leadership development system in active learning type
tuition for Experiential Learning Model —

Yutaka SATO¹⁾, Chikako KAKOI¹⁾

Abstract

Upbringing of the practical leadership is demanded in the teachers college. NIFS was carried out a review of systematic and systematic health physical education teacher training curriculum. In the class of the Health and Physical Education Law IV, we examined the program development for students with high willingness to aim of teachers. Students repeated reflection by the unit structure diagram, mock lesson and video viewing, aimed at the development of unit design power and overhead power, improvement of teacher teaching skills and development of introspective thinking and tuition fix force in 2013. As a result, the effectiveness has been suggested in the development of class configuration capabilities and practical leadership from consciousness changes in the student's pre-post. But the limits of lack such as simulated lesson of reality among university students were also revealed. Accordingly, fiscal 2014, it was added to the class experience in research collaboration junior high school to the program cycle of the past. In addition, knowledge and experience learning model (Kolb, D.) in Physical Education of the past while based, et al., And incorporating the program with enhanced opportunities for introspective reflection by video viewing. And from quality assurance point of view of leadership, utilizing the university version unit structure diagram, we proceeded to clarify the planning and guidance content of lesson plans based on the planning of teaching and evaluation. As a result, in that it is recognized to be of particular importance for the lesson planning, in addition to that, "Understanding the Course of Study" is being felt to be important, "Understanding of student", "flexibility to respond to the situation." changes were observed in the field. In addition, from the reflection of the university version unit structure diagram, fix a problem that Support to the school hours outside challenge, re-examination of the evaluation opportunities of analytical challenges and examination of evaluation method for evaluating the fixing of the general skills became clear.

Keywords: aunit structure diagram, active learning, health and physical education teacher training, practical leadership

¹⁾ 鹿屋体育大学

要約 (和訳)

教員養成では、実践的指導力の育成が求められている。本学では、体系的・系統的な保健体育科教員養成カリキュラムの見直しの中で、保健体育科教育法Ⅳでは、教員の目指す意欲の高い学生に対するプログラム開発を検討し、2013年度は、単元構造図、模擬授業、ビデオ視聴による省察を繰り返すことで、単元設計力・俯瞰力の育成、教師指導技術の向上、内省的思考力及び授業修正力の育成を目指した。その結果、学生の事前事後の意識変化から授業構成力や実践的指導力の育成に有効性が示唆されたが、大学生同士の現実感の欠如など模擬授業の限界も明らかとなった。

そこで、2014年度は、これまでのプログラムサイクルに研究連携中学校における授業体験を加え、これまでの体育科教育における知見及び体験学習モデル (Kolb, D.) らをベースとしつつ、ビデオ視聴による内省的省察の機会を強化したプログラムを取り入れた。また、指導の質保証の視点から、大学版単元構造図を活用し、指導と評価の計画に基づく授業計画の立案及び指導内容の明確化を進めた。

その結果、授業づくりについて特に重要であると認識した点において、「学習指導要領の理解」が重要であると感じている点は、2013年度に実施した事後アンケート (9項目) の結果と同様であるが、2014年度は、さらに「生徒の理解」、「状況に柔軟に対応すること」等の項目に変化が認められた。

また、大学版単元構造図の省察から、授業時間外課題へのサポート、分析的課題の評価機会の再検討、汎用的技能の定着を評価するための評価方法の検討などの修正課題が明らかとなった。

Keywords: 単元構造図, アクティブ・ラーニング, 保健体育科教員養成, 実践的指導力

I. 序論

1. 大学教育におけるアクティブ・ラーニング型授業導入の背景

大学教育においては、専門的知識・理解、総合的な学習経験、創造的志向、汎用的技能、態度・志向性などを兼ね備えた「学士力」の育成 (文部科学省, 2008) をねらいとする能動的学習 (アクティブ・ラーニング) の充実が求められている。松下 (2015) は、アクティブ・ラーニングの一般的特徴として、学生は、授業を聴く以上の関わりをしていること、情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること、学生は高次の思考 (分析, 総合, 評価) に関わっていること、学生は活動 (例: 読む, 議論する, 書く) に関与していること、学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること、認知プロセスの外化を伴うことなどの要件を挙げている。

すなわち、アクティブ・ラーニングとは、単に授業スタイルの工夫を指すものではなく学術的に明らかにされた原理や原則や学問領域を特徴づける専門的技術の実践的活用を通して、内省的思考力を高め、深い理解を促し汎用的に活用してい

る資質・能力を育成することにあると言える。

また、体験学習の教育的効果の論議は、アメリカの教育学者 Jon Dewey (1910) が提唱した問題解決学習に端を発している。Jon Dewey は、問題の解決は、「人間の具体的な環境の中で、ある問題に突き当たったとき初めて主体的に行われる」と論じ、その解決のための反省的思考 (reflective thinking) に基づく問題解決の思考過程を重視している。体験的学習の手法を確立したのは、1940年代にグループダイナミクス研究の創始者である Kurt Lewin と言われる (佐藤・佐野, 2004)。津村 (1991) は、この学習法を体験学習法として紹介し、小柳 (2004) は、アクション・リサーチの源流として紹介している。Kolb, D. ら (1971) は、新しい行動を修正したり、今までの行動を修正したりするための体験学習モデル (Experiential Learning Model) を提唱した。この理論が野外教育の理論的根拠となったことを林・飯田 (2002) が明らかにしている。

筆者 (2005) は、Kolb の体験学習モデルを背景として高等学校において野外活動プログラムを3年間にわたり継続的に実施することで、クラス

の凝集性や帰属意識に寄与することを報告した。

これらの問題解決型学習の研究におけるアプローチの違いはあるが、共通する留意点として、活動や共同といった体験をさせることが重要なのではなく、その活動を通して身につけさせたいことを提供者側が明確にしていることであり、活動を終えた後に深い気づきをもたらす内省的・反省的リフレクションの機会を提供し、答えを授けるのではなく自らが自覚的に気付くことが重要と言える。その成果として、学習者は、体験を通して自ら知識や技能を獲得したり、新たな課題を発見したりすることで、次の新たな学びを生み出すというサイクルを定着させ、自発的な学習能力を高めることにある。

カリキュラム提供者は、緻密な授業設計によって、意図性のある活動を段階的に提供し、活動の完遂が最終目的ではなく、混乱や失敗体験も含めたプロセスの中で学習者間の相互作用、コーディネーターとしての教師の働きかけによって、深い学びに導けたかどうか重要となると言えよう。

2. 2013年度保健体育科教育法Ⅳの取組と課題

近年、教員養成段階においては「実践的指導力」の育成が求められ、講義による学習指導要領の理解のみに留まらず、授業計画、指導実践、省察の連続体験を通じたカリキュラム開発の必要性が高まっている。

教員養成系の大学では、学生が教師役や生徒役を務める模擬授業を実施し、その授業について評価・省察する実践が行われている。筆者の所属する大学においてもカリキュラム改訂に際して、保健体育科教育法全体の授業内容を体系的に見直し、2013年度開講の保健体育科教育法Ⅳの授業では、教員採用後に求められる授業構築力・修正力等の育成を図ることをねらいとし、単元計画及び学習指導案の作成に基づく模擬授業を行い、撮影した授業映像を振り返り、フィードバックを図った（佐藤・柊，2015）。また、授業提供側の指導内容を構造的に分析し修正を図るため、保健体育

科教育法Ⅳの授業計画の際に大学版単元構造図の作成を試みた。

受講学生の事後アンケートからは、単元構造図の作成→模擬授業→映像を見ての振り返りという一連の流れの反復は、授業構成力や実践的指導力の育成に有効であり、各自の指導能力の把握や課題が明確となったと捉えていることが示唆された。一方で、授業担当者の省察においては、生徒役が学生であることから、生徒の実態に応じた助言や発問、対応などを体験するための、模擬授業における役割カードの導入や実際の学校現場の指導体験を組み込むこと、健康・安全の確保が求められる領域の指導技術の確認、指導経験の少ない領域を取り上げる際の時間配当等が課題として挙げられた。

3. 本研究の目的

本研究は、現在の中央教育審議会の論議に見られるアクティブ・ラーニング型授業の導入の要請、体験学習モデルによる教育実践を背景とし、2013年度保健体育科教育法Ⅳのカリキュラムを修正し、鹿屋体育大学における教育実習前の実践的指導力の育成を目的としたプログラムを検討したものである。

2014年度開講の保健体育科教育法Ⅳでは、2013年度に行った「単元構造図の作成、模擬授業の実施、映像視聴の連続体験」に加え、「中学校における授業体験」を組み込んだ新たなプログラムを実施した。本稿では、2014年度開講の保健体育科教育法Ⅳの授業実践の概要と、受講学生の事後アンケート及び教師側が設定した単元構造図と学習評価の省察について報告する。

Ⅱ. 2014年度における保健体育科教育法Ⅳの授業実践の概要と成果

1. 授業設計の意図

「アクティブ・ラーニング型授業」プログラムの基本的な構造は、Kolb（1971）らが開発した体験学習理論（①具体的な体験、②体験の内省と観

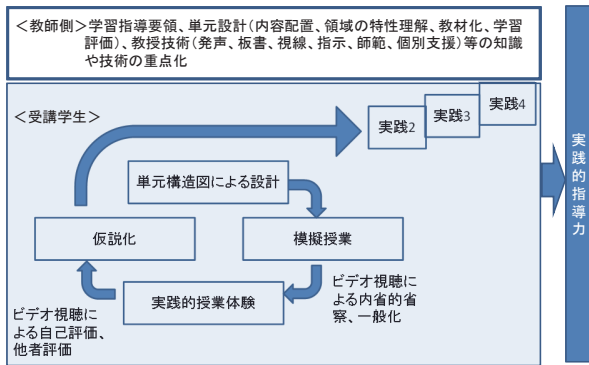


図1 アクティブ・ラーニング型授業モデル

察, ③一般化, ④仮説化) や小柳 (2004) の整理によるアクション・リサーチ proactive 型 (①実践, ②希望と起こりうる出来事の明確化, ③データの収集, ④データの意味解釈, ⑤改善のための選択的方法の省察, ⑥別の実践を試みる) を参考としながら, 単元構造図による授業設計, 大学模擬授業における模擬実践, 連携中学校における授業体験を柱として, 模擬授業及び授業体験後には, 映像視聴による視点を重点化した振り返りによって自身及び他者の教師行動を観察評価し修正を図ることとした (図1)。

単元構造図による授業設計は, 単元を俯瞰し, 学習指導要領で示されている技能, 態度, 知識, 思考・判断の指導内容のうち, 提供する1時間で何を重点化して指導するのか, また, 何を学習評価するのかを特定することで, 実施時間で生徒に「何を教え, 何を身につけさせるのか」を明確にする。指導経験の少ない学生にとっては, 当該時間の技能の師範や内容の理解が優先され, 単元といった連続する時間で授業が構築されていることの意識を持ちにくい。学習サイクルの繰り返しを通して, 単元の俯瞰の中で当該時間が提供されていることを実践的に体験する。

また, 2013年度の模擬授業のみの体験では, 大学生が生徒役であることから, 現実的な生徒とは異なる突発的な対応機会が創出しにくい (佐藤・梶, 2015) という課題に対して, 中学校における実際の生徒への指導を体験 (実践的授業体験) することで, 教師側が求める資質・能力を体験的に実感しやすくなることを想定している。

この一連の体験学習サイクルの中で, 観察の視点を教師行動の授業マネジメント等の基礎的条件を中心とした省察から, 授業の根幹である内容的条件の省察に移行することで, 授業の本質的な理解と自身の課題への深い気づきを引き出すことで, 授業設計力及び授業修正力の向上を意図したものである。

2. 履修・開講状況

受講生は2015年度に教員採用試験を受験予定の大学3年生14名 (男子: 12名, 女子: 2名) で受講生全員が教育実習前の時期であった。授業は2014年10月~2015年2月の期間で, 授業回数は全15回であった。授業担当者は2013年度と同じ2名 (授業担当者A: 教授, 授業担当者B: 非常勤講師) で行った。

3. 授業計画

2014年度は, 本大学の連携協力校であるH中学校と事前に協議を行い, 授業の趣旨を理解いただいた上で, 授業協力の承諾を得た。授業計画にあたり, 大学の授業日・時間と中学校の保健体育の時間割を検討し, 1年生から3年生まで各学年で授業を行えるよう, 日程調整を行った。その結果, 「器械運動・中学2年生」, 「保健・中学3年生」, 「球技 (バスケットボール)・中学1年生」の授業で授業体験を実施することとなった。さらに, 指導が難しいとされる「ダンス」領域について学内模擬授業のみ全員が実施できるよう計画に追加した。2013年度の授業と同様, 全15回の保健体育科教育法Ⅳの「単元構造図」を作成して授業実施計画を行った。単元構造図は, 授業担当者Bが原案を作成し, 開発者である授業担当者Aが修正・加筆を繰り返すことで, 単元構造図を介した授業設計の共有を図った。評価の割合は, 情意的領域は20%, 認知的領域及び技能的領域は40%とした (図2)。なお, この単元構造図の簡易版を, 授業初回のオリエンテーション時に学生に提示した。

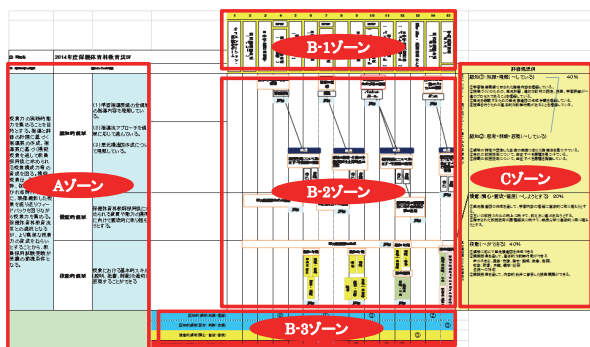


図2 2014年度保健体育科教育法Ⅳ 単元構造図(A・B・Cゾーン)

4. 学生の授業内での取り組み

学生は、6グループ(A～F班)、各2～3名に分け、中学校での「器械運動」、「保健」、「バスケットボール」の授業担当班を決めた。単元構造図の作成は、担当に関わらず、全班が全分野について行った。単元構造図作成後に全班分の単元構造図および授業計画を公表し合い、授業担当班は、各班の発表を参考に、実際に中学校で行う授業計画を立て、学習指導案(時案)及び教材づくりを行った(資料1～3)。中学校の授業(対象生徒:器械運動22名、保健21名、バスケット35名)では、担当班以外の学生も生徒に指導する場面を作れるよう工夫した授業計画を立てた。次に作成した学習指導案をもとに担当班の授業者(教師役)が、中学校での50分の授業を想定した学内模擬授業を行った。学内模擬授業では、学生が生徒役をつとめ、模擬授業終了後、授業者(教師役)と受講者(生徒役)の学生で授業反省及び意見交換を行った。模擬授業の様子は、動画撮影し、模擬授業後に授業映像を編集し、学内のeラーニングシステムであるWebClassにアップした。授業者(教師役)の学生は、授業映像と授業反省を踏まえ、授業担当者Aの指導を仰ぎながら再度指導案及び教材を修正した。最終確定した学習指導案(時案)は、中学校の授業体験前に中学校側に持参し、保健体育科教員との間で情報を共有した。実際の中学校の授業体験では、学習指導案(時案)に基づき、担当班の学生が教師役を務め、担当班以外の学生も指導に加わった。授業体験の様子は、3台のカメラを使って、教師役の学生の動き

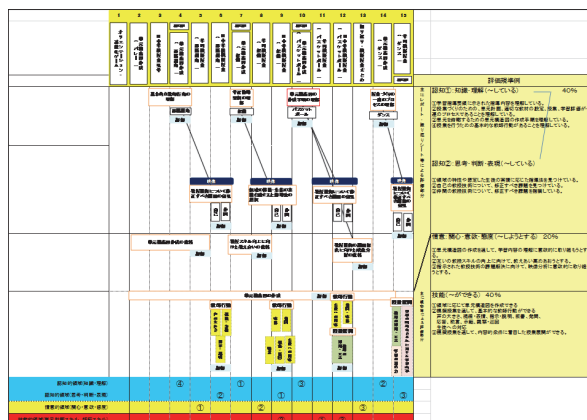


図3 2014年度保健体育科教育法Ⅳ 単元構造図(B・Cゾーン拡大)

や授業全体の動き、生徒の動きをとらえられるよう動画撮影し、授業体験後に授業映像を編集し、学内模擬授業の時と同様にWebClassにアップした

受講生に次週の授業までに、映像をチェックしながら、リフレクションレポートを作成させweb上で提出を求めた。省察課題については、4回の模擬授業を通して、基礎的条件である「声の大きさ」や「視線・表情」、「指示・説明」などの教師行動から、内容的条件となる「教材の活用・工夫」、「学習の進め方」などの授業展開に着眼点を発展させた(図3)。なお、「ダンス」に関しては、単元構造図の作成と学内模擬授業、リフレクションレポートの作成を実施した。以下の模擬授業で作成した指導案及びリフレクションレポートについて例を示す。生徒・学生には、事前に、提出物に関しては、個人の名前や情報などを特定できない形で報告書や学会、論文等に公表することがある旨を口頭・書面にて確認し、了承を得られた資料を採用した。

(資料1) 器械運動: 学生作成単元構造図例, 学習指導案例, リフレクションレポート例

(資料2) 保健: 学習指導案例, 学習ノート例, リフレクションレポート例

(資料3) バスケットボール: 学習指導案例, 学習ノート例, リフレクションレポート例

5. 授業の成果

アンケートを第1回目のオリエンテーション時と全15回の授業終了後に実施した。アンケートの内容は授業評価(成績)に反映されないことを口頭・文書にて確認の上、実施した。有効回答は13名(男子:11名, 女子:2名)であった。調査内容は、①教員・授業づくりへの印象(授業受講前・授業受講後)、②単元構造図および授業計画の作成、模擬授業(教師役・生徒役・観察者役)、映像を視聴してのリフレクションレポートの作成、保健体育科教育法Ⅳの授業全体についての感想・意見、③授業づくりについて特に重要であると認識した点、④授業を受講しての自分自身の変化であった。

(1) 教員・授業づくりへの印象(授業受講前・授業受講後の比較)

対応のある t 検定を用いて授業受講前と受講後の値の比較を行った結果(図4)、「教員になれる気がする」の項目が授業受講後に有意に高くなっていた($p = 0.02$)。また、「教員になりたい」の項目は、授業受講前・受講後ともに 4.9 ± 0.4 点(平均±標準偏差)と非常に高い値を示した。学内模擬授業や中学校での授業体験などの実際の経験が、教員を目指す上での自信に繋がり、さらに教員になりたいという意志も維持できた可能性が示唆された。

(2) 単元構造図および授業計画の作成について

表1は、単元構造図および授業計画作成後の効果感を示したものである。全項目において4.5点以上の高い点を示し、「授業目標・内容の理解が深まった」、「授業時の教師行動(声の大きさ・板書・発問・示範・観察など)について理解が深まった」、「授業を行う上で、単元構造図の作成は必要である」の項目については、満点の5.0点であった(表1)。受講生自身が単元構造図や指導案の作成を行うことで、教師行動との関連性についてまで理解を広げられた可能性が示唆された。

(3) 学内模擬授業について

表2は、学内模擬授業後の効果感を示したもの

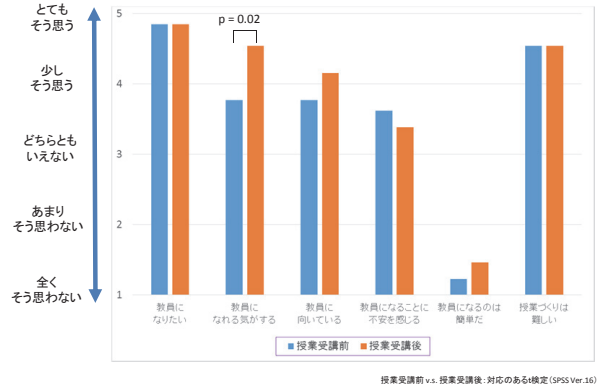


図4 教員・授業づくりへの印象(授業受講前・授業受講後の比較)

表1 単元構造図および授業計画作成の授業後の効果感

NO	質問	平均値±標準偏差
1	授業目標・内容の理解が深まった	5.0 ± 0.0
2	教えるべき内容の理解が深まった	4.9 ± 0.3
3	目標と評価について理解が深まった	4.8 ± 0.4
4	評価機会について理解が深まった	4.8 ± 0.4
5	年間計画と単元計画について理解が深まった	4.9 ± 0.4
6	教材づくりについて理解が深まった	4.8 ± 0.4
7	学習過程について理解が深まった	4.6 ± 0.5
8	目標に準拠した評価について理解が深まった	4.9 ± 0.4
9	学習指導要領の理解が深まった	4.7 ± 0.5
10	教材の特性について理解が深まった	4.5 ± 0.5
11	授業時の教師行動(声の大きさ・板書・発問・示範・観察など)について理解が深まった	5.0 ± 0.0
12	授業時の生徒の学習形態について理解が深まった	4.8 ± 0.4
13	一時間の授業だけではなく、単元として授業の全体像をとらえることができた	4.8 ± 0.4
14	授業を行う上で、単元構造図の作成は必要である	5.0 ± 0.0

※とてもそう思う(5)・少しそう思う(4)・どちらともいえない(3)・あまりそう思わない(2)・全くそう思わない(1)まで5件法にて回答

表2 学内模擬授業後の効果感

NO	質問	平均値±標準偏差
1	授業目標・内容の理解が深まった	4.9 ± 0.4
2	教えるべき内容の理解が深まった	4.9 ± 0.3
3	目標と評価について理解が深まった	4.6 ± 0.5
4	評価機会について理解が深まった	4.5 ± 0.5
5	年間計画と単元計画について理解が深まった	4.8 ± 0.4
6	教材づくりについて理解が深まった	4.9 ± 0.3
7	学習過程について理解が深まった	4.6 ± 0.5
8	目標に準拠した評価について理解が深まった	4.8 ± 0.4
9	学習指導要領の理解が深まった	5.0 ± 0.0
10	教材の特性について理解が深まった	4.8 ± 0.4
11	授業時の教師行動(声の大きさ・板書・発問・示範・観察など)について理解が深まった	4.9 ± 0.4
12	授業時の生徒の学習形態について理解が深まった	4.7 ± 0.5
13	一時間の授業だけではなく、単元として授業の全体像をとらえることができた	4.9 ± 0.3

※とてもそう思う(5)・少しそう思う(4)・どちらともいえない(3)・あまりそう思わない(2)・全くそう思わない(1)まで5件法にて回答

である。全項目において4.5点以上の高い点を示し、「学習指導要領の理解が深まった」の項目は満点の5.0点であった(表2)。また、「授業目標・内容の理解が深まった」、「教えるべき内容の理解が深まった」、「教材づくりについて理解が深まった」、「授業時の教師行動(声の大きさ・板書・発問・示範・観察など)について理解が深まった」、「一時間の授業だけではなく、単元として授業の全体像をとらえることができた」の項目に関して

も、平均点が4.9点と非常に高い点を示した。実践的な模擬授業を通して、授業に関する多角的な理解が促された可能性が示唆された。

(4) 中学校での模擬授業体験について

表3は、中学校での模擬授業体験後の効果感を示したものである。全項目において4.7点以上の非常に高い点を示し、「授業目標・内容の理解が深まった」、「授業時の教師行動（声の大きさ・板書・発問・示範・観察など）について理解が深まった」、「学内模擬授業の時とは異なる発見があった」の項目は満点の5.0点であった（表3）。実際の中学生を前にしたリアル感のある授業は、学生達にとって非常に学びの多い場であったことが推察された。

(5) 授業映像を視聴してのリフレクションレポート作成について

表4は、学内模擬授業および中学校での模擬授業体験の映像視聴を通してのリフレクションレポート作成の効果感を示したものである。全項目において4.4点以上の高い点を示し、「教えるべき内容の理解が深まった」、「教材づくりについて理解が深まった」、「目標に準拠した評価について理解が深まった」、「授業時の教師行動（声の大きさ・板書・発問・示範・観察など）について理解が高まった」、「自分自身の授業を客観的に観察することは、教授技術の改善に有効であった」、「自分以外の人の映像を見て評価を行うことは、自分自身の授業改善に役立った」、「授業時には気付かなかったが、映像視聴によって、新たに発見された事象があった」、「自学自習が促進された」、「毎回のレポート課題において、様々な観点から評価を行うことで、授業を行う上でのポイントをより明確に理解することができた」の7項目は平均点が4.9点で非常に高い値を示した（表4）。授業映像を視聴してのリフレクションレポートの作成は、「授業映像およびe-ラーニングの活用」（鬼澤ら、2012、藤田、2013）の指摘と同様、授業づくりに関する理解を深めると共に映像視聴を通して客観的に自分自身を振り返ることができる機会を保障できる可能性が示唆された。

(6) 保健体育科教育法Ⅳの授業全体について

表5は、保健体育科教育法Ⅳの授業全体を通し

表3 中学校での模擬授業体験後の効果感

NO	質問	平均値±標準偏差
1	授業目標・内容の理解が深まった	5.0 ± 0.0
2	教えるべき内容の理解が深まった	4.9 ± 0.3
3	目標と評価について理解が深まった	4.9 ± 0.3
4	評価機会について理解が深まった	4.8 ± 0.4
5	年間計画と単元計画について理解が深まった	4.9 ± 0.3
6	教材づくりについて理解が深まった	4.9 ± 0.4
7	学習過程について理解が深まった	4.7 ± 0.5
8	目標に準拠した評価について理解が深まった	4.9 ± 0.4
9	学習指導要領の理解が深まった	5.0 ± 0.0
10	教材の特性について理解が深まった	4.9 ± 0.4
11	授業時の教師行動（声の大きさ・板書・発問・示範・観察など）について理解が深まった	5.0 ± 0.0
12	授業時の生徒の学習形態について理解が深まった	4.8 ± 0.4
13	一時間の授業だけではなく、単元として授業の全体像をとらえることができた	4.8 ± 0.4
14	学内模擬授業の時とは異なる発見があった	5.0 ± 0.0

※とてもそう思う(5)・少しそう思う(4)・どちらともいえない(3)・あまりそう思わない(2)・全くそう思わない(1)まで5件法にて回答

表4 授業映像を視聴してのリフレクションレポート作成の効果感

NO	質問	平均値±標準偏差
1	授業目標・内容の理解が深まった	4.8 ± 0.6
2	教えるべき内容の理解が深まった	4.9 ± 0.3
3	目標と評価について理解が深まった	4.5 ± 0.7
4	評価機会について理解が深まった	4.4 ± 0.7
5	年間計画と単元計画について理解が深まった	4.5 ± 0.7
6	教材づくりについて理解が深まった	4.9 ± 0.4
7	学習過程について理解が深まった	4.5 ± 0.5
8	目標に準拠した評価について理解が深まった	4.9 ± 0.4
9	学習指導要領の理解が深まった	4.6 ± 0.7
10	教材の特性について理解が深まった	4.8 ± 0.4
11	授業時の教師行動（声の大きさ・板書・発問・示範・観察など）について理解が深まった	4.9 ± 0.4
12	授業時の生徒の学習形態について理解が深まった	4.8 ± 0.4
13	一時間の授業だけではなく、単元として授業の全体像をとらえることができた	4.7 ± 0.6
14	自分自身の授業を客観的に観察することは、教授技術の改善に有効であった	4.9 ± 0.3
15	自分以外の人の映像を見て評価を行うことは、自分自身の授業改善に役立った	4.9 ± 0.4
16	授業時には気付かなかったが、映像視聴によって、新たに発見された事象があった	4.9 ± 0.4
17	自学自習が促進された	4.8 ± 0.4
18	毎回のレポート課題において、様々な観点から評価を行うことで、授業を行う上でのポイントをより明確に理解することができた	4.8 ± 0.4

※とてもそう思う(5)・少しそう思う(4)・どちらともいえない(3)・あまりそう思わない(2)・全くそう思わない(1)まで5件法にて回答

表5 保健体育科教育法Ⅳ授業全体の効果感

NO	質問	平均値±標準偏差
1	単元構造図作成→模擬授業→映像視聴によるレポート作成の一連の作業を繰り返すことは、授業構成力の育成や授業スキルの向上に有効である	5.0 ± 0.0
2	保健体育科教育法Ⅳを受講して、自分自身の成長を実感できた	4.9 ± 0.4
3	保健体育科教育法Ⅳを受講して、自分自身の課題が明確になった	5.0 ± 0.0

※とてもそう思う(5)・少しそう思う(4)・どちらともいえない(3)・あまりそう思わない(2)・全くそう思わない(1)まで5件法にて回答

での効果感を示したものである。「単元構造図作成→模擬授業→映像視聴によるレポート作成の一連の作業を繰り返すことは、授業構成力の育成や授業スキルの向上に有効である」、「保健体育科教育法Ⅳを受講して、自分自身の成長を実感できた」、「保健体育科教育法Ⅳを受講して、自分自身の課題が明確になった」の3項目すべて4.9点以上の非常に高い値を示し（表5）、中学校での授業体験を取り入れた保健体育科教育法Ⅳの授業は、学生自身が有効性や授業を通しての成長を実

感し、今後取り組むべき自己の課題について前向きに捉えている可能性が示唆された。

(7) 授業づくりについて特に重要であると認識した点

表6は、授業づくりについて特に重要であると認識した点について、回答割合を示したものである。全15項目の中から、最も当てはまるものの3つを回答させた。授業前には、「教材の工夫(61.5%)」や「楽しく行うこと(53.8%)」の項目が50%以上で上位を占めていたが、授業後には、「学習指導要領の理解(61.5%)」、「生徒の理解(46.2%)」が上位を占め、「状況に柔軟に対応すること」の割合が授業前と比較して授業後に有意に上昇し(15.4%→30.8%)、反対に「楽しく行うこと」は授業前と比較して授業後に有意に減少した(53.8%→30.8%) (表6)。

「学習指導要領の理解」が重要であると感じている点は、2013年度に実施した事後アンケート(9項目)の結果と同様である(佐藤・梶, 2005印刷中)が、2014年度では、さらに「生徒の理解」、「状況に柔軟に対応すること」等の項目に変化が認められた。

校内模擬授業の体験によって、部活動の指導のように技術指導中心の価値観から全員が楽しめるようにといった指導観の変化(浅い理解の段階)がこれまでの授業においてもしばしば見られた。しかしながら、実際の学校現場における実際の授業は、一過性の楽しさを提供しているのではなく、3年間という長期的な視点から単元を検討し、学習指導要領に示された内容を具体的に解釈し、生徒の実態・実情に応じて教材化し、日常の授業で起こる想定外の反応や状況の変化にあわせた指導が求められる。2014年度における中学校体験授業を組み込んだアクティブ・ラーニング型授業の受講学生の変化は、特に「生徒理解」、「状況への対応」など授業づくりで求められる重要な視点(深い理解の段階)に気付く機会となったことが伺える。

(8) 授業を受講しての自分自身の変化

表6 授業づくりについて特に重要であると認識した点

NO	項目	授業前		授業後		有意差
		割合	割合	割合	割合	
1	単元全体で考えることが重要である	38.5 %	38.5 %	38.5 %	38.5 %	
2	楽しく行うことが重要である	53.8 %	30.8 %	30.8 %	30.8 %	※
3	学習規律を保つことが重要である	0.0 %	7.7 %	7.7 %	7.7 %	
4	教材の工夫が重要である	61.5 %	7.7 %	7.7 %	7.7 %	
5	学習指導要領の理解が重要である	23.1 %	61.5 %	61.5 %	61.5 %	
6	生徒の理解が大切である	38.5 %	46.2 %	46.2 %	46.2 %	
7	個別支援が大切である	0.0 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
8	自身の師範技術が大切である	0.0 %	7.7 %	7.7 %	7.7 %	
9	教材特性を理解することが大切である	7.7 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
10	経験を積むことが大切である	38.5 %	30.8 %	30.8 %	30.8 %	
11	状況に柔軟に対応できることが大切である	15.4 %	30.8 %	30.8 %	30.8 %	※
12	体力を高めることが大切である	7.7 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
13	技能を保障することが大切である	0.0 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
14	生徒間の教え合いの機会保障	0.0 %	23.1 %	23.1 %	23.1 %	
15	考える機会の保障が大切である	15.4 %	15.4 %	15.4 %	15.4 %	

授業受講前 v4 - 授業受講後 - カイ二乗検定 (SPSS Ver.16)
※: p < 0.05

表7 授業を受講しての自分自身の変化

NO	項目	授業前(期待)		授業後(結果)		有意差
		割合	割合	割合	割合	
1	教育実習への不安が払拭できた	15.4 %	7.7 %	7.7 %	7.7 %	※
2	自分の教授技術の課題を明確にできた	53.8 %	61.5 %	61.5 %	61.5 %	
3	教師になる認識が高まった	15.4 %	61.5 %	61.5 %	61.5 %	
4	教員への向き不向きを見極められた	15.4 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
5	授業の観察力が高まった	15.4 %	7.7 %	7.7 %	7.7 %	※
6	省察力が高まった	0.0 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
7	仲間(同僚)と協同する力が高まった	7.7 %	15.4 %	15.4 %	15.4 %	
8	授業づくりの達成感が味わえた	0.0 %	15.4 %	15.4 %	15.4 %	
9	教員採用後に有用な経験ができた	46.2 %	23.1 %	23.1 %	23.1 %	
10	自分の指導能力が把握できた	53.8 %	38.5 %	38.5 %	38.5 %	
11	指導が上達するプロセスが体験できた	15.4 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
12	状況変化への対応力が高まった	7.7 %	7.7 %	7.7 %	7.7 %	
13	授業づくりの課題が克服できた	38.5 %	0.0 %	0.0 %	0.0 %	
14	何をすべきかが明確になった	15.4 %	23.1 %	23.1 %	23.1 %	
15	学び続ける態度が身に付いた	0.0 %	23.1 %	23.1 %	23.1 %	

授業受講前 v4 - 授業受講後 - カイ二乗検定 (SPSS Ver.16)
※: p < 0.05

表7は、保健体育科教育法Ⅳの授業を受講しての自分自身の変化について、回答割合を示したものである。全15項目の中から、最も当てはまるものの3つを回答させたが、授業前は「自分の教授技術の課題の明確化(53.8%)」、「自分の指導能力の把握(53.8%)」、「教員採用後の有用な経験(46.2%)」、「授業づくりの課題の克服(38.5%)」が上位を占め、授業後においても「自分の教授技術の課題の明確化(61.5%)」が最上位となり、同率で「教師になる認識が高まった(61.5%)」、次点で「自分の指導能力を把握できた(38.5%)」の回答が上位を占めた(表7)。これらの結果は、学生自身がこの保健体育科教育法Ⅳの授業に期待をしていた事柄が授業を通して学ぶことができた実感していると考えられ、また、新たに「教師になる認識が高まった」の項目が上位に上がっていることから、実際の授業の計画や教材づくり、

実際の中学校での授業体験を通して、教師の仕事を経験できたことが大きく関係している可能性が示唆された。

一方で、事前・事後において、「教育実習への不安が払拭できた」の項目が15.4%→7.7%、「授業の省察力が高まった」の項目が15.4%→7.7%と、有意な低下傾向が見られた。このことは、指導すべき内容の理解や身につけるべき技術や能力の認識の高まりによって自身の課題や客観的な自己把握が進むことで、より不安が高まり、洞察することの難しさを認識できたものと言える。「学びつづける教員像」として、モデルとなる教員の多くが「わかっていないことがわかる」という認識をもち、常に現状に満足せず、謙虚で良い授業を構築したいという情熱を有していることから、客観的な自己認識が深まったものと推察される。

Ⅲ. 受講学生の成果からみた大学版単元構造図による授業担当者の省察

これらの結果をもとに、授業担当者A・Bは、授業終了後に、保健体育科教育法Ⅳにおいて作成した大学版単元構造図の省察を行った。

特に今年度は、指導と評価の重点化を進め、1回の授業において指導機会と評価機会のバランスを再検討し、評価基準を1～2つに絞り込み評価機会を設定した(図5)。

また、授業担当者の省察の手続きとして次の視点から修正を進めた。

1. 設定した評価基準の学生の実現状況(Cゾーン)

学習評価については、2013年度の3段階による評価から表8に示す5段階の評価に改めた。それにより、学生の実現状況をより細かく記録できること、各観点から総合的評定への精度を高めることを意図した。また、表8の判定指標によって5段階で形成的評価を行い、観点毎の配点に応じて100点満点に換算し大学の設定する成績基準に換算することとした。

図5 2014年度保健体育科教育法Ⅳの授業における評価機会

表8 評価基準(B)を基準とした判断の目安

判断の目安	判定
十分な達成状況であり、その成果が特にすぐれているもの	A○
十分な達成状況であるもの	A
概ね満足と判断できるもの	B
達成に課題が見られるもの	B×
達成に課題がみられるもののうち、特に手だてが必要なもの	C

表9 設定した評価基準の学生の実現状況

	A○	A	B	B×	C
態度・思考・判断	①単元構造図の作成を通して、学習内容の理解に意欲的に取り組もうとする。	78.0%	0.0%	21.4%	0.0%
	②互いの教授スキルを向上に向けて、教え合いの基を築こうとする。	78.0%	0.0%	21.4%	0.0%
	③指定された教授技術の課題解決に向けて、換骨分析に意欲的に取り組もうとする。	35.7%	35.7%	7.1%	0.0%
割合	64.3%	11.9%	23.8%	0.0%	0.0%
知識・理解	①領域の特性や習得した生徒の実績に基いた指導法を見つけている。	7.1%	85.7%	7.1%	0.0%
	②自己の教授技術について、修正すべき課題を見つけている。	42.9%	42.9%	14.3%	0.0%
	③仲間の教授技術について、修正すべき課題を指摘している。	35.7%	57.1%	7.1%	0.0%
割合	46.4%	46.4%	7.1%	0.0%	0.0%
専門的技術	①領域に基いた単元構造図を作成できる	7.1%	42.9%	50.0%	0.0%
	②授業体験を通して、基本的な教師行動ができる ア 声の大きさ、視線・表情、指示・説明、板書・発問。 イ 応答、教養、示範、観察・巡回 ウ 生徒への対応	14.3%	50.0%	35.7%	0.0%
	③模範授業を通して、内容的条件に基いた授業展開ができる。	35.7%	64.3%	0.0%	0.0%
割合	21.4%	46.4%	32.1%	0.0%	0.0%

評価方法については、情意的領域は、授業担当者による観察及びWebClassにおけるアクセス状況及びレポートの記載状況から評価を行った。また、認知的領域については、レポートの記載内容を分析的に評価した。さらに、技能的領域については、提出された単元構造図の成果物から評価を行い、体験授業及びダンスの学内授業の教師行動について当日の行動観察及びビデオ映像により評価を行った。いずれも授業担当者A・Bがそれぞれ評価を行い、評価結果が異なる場合は、合議により妥当性を検討した。

観点別の評価結果を表9に示した。情意的領域では、①単元構造図の作成を通して、学習内容の理解に意欲的に取り組もうとする、②互いの教授

スキルの向上に向けて、教えあい高めあおうとする、という観点における評価分布は、いずれもA○:78.6%, A:0.0%, B:21.4%, B×:0.0%, C:0.0%という結果であった。③指示された教授技術の課題解決に向けて、映像分析に意欲的に取り組もうとする、という観点における評価分布については、A○:35.7%, A:35.7%, B:7.1%, B×:0.0%, c:0.0%であり、①、②については、いずれもグループ活動時における観察評価であり、Bの評価は、公式戦等による欠席のため評価機会を別に設定した評価である。評価機会の欠席者を除く学生は全てA○と評価できる状況であり、グループワークを通して学生間の学びの相互作用が効果的に働いた結果であると考えられる。一方、③の映像分析は、時間外の主体的な学びをレポートから判断したものであるが、映像分析の視点をあらかじめ明示したことが成果につながったものと考えられるが、グループワークに対する取り組みに比較して映像視聴の取り組みにA○の頻度が低かったことは、授業外の時間において、ビデオを視聴し内省するという作業に対して求められる時間外学習の効率的確保が学生にとってやや差があることが原因と推察される。

認知的領域については、知識・理解については、全ての学生がA○であった。これは、これまでの保健体育科教育法Ⅰ～Ⅲの成績上位者を対象としていることから、基本的知識が定着しているためであると考えられる。また、思考・判断については、①領域の特性や想定した生徒の実情に応じた指導法を見つけている、A○:7.1%, A:85.7%, B:7.1%, B×:0.0%, C:0.0%、②自己の教授技術について、修正すべき課題を見つけている、A○:42.9%, A:42.9%, B:14.3%, B×:0.0%, C:0.0%であり、③仲間の教授技術について、修正すべき課題を指摘している、A○:35.7%, A:57.1%, B:7.1%, B×:0.0%, C:0.0%と到達目標である評価規準は満たしているが、評価分布にばらつきが見られた。①については、協力校の現職中学校教師の授

業を見学参加した3回目の評価であり、特に優れた状況(A○)の学生が二つの観点に比べて少なかったことは、学生の分析が深い洞察ができる状況まで高まっていなかった段階で形成的評価を実施したこと、ベテラン教師の授業から自身の課題に置きかえて省察することの難しさ、実際の生徒の実情のイメージが希薄であることなどが考えられる。評価規準もしくは評価のタイミングの修正の検討が必要である。

技能的領域における評価分布は、①領域に応じて単元構造図を作成できる、A○:7.1%, A:42.9%, B:50.0%, B×:0.0%, C:0.0%、②授業体験を通して、基本的な教師行動ができる、A○:14.3%, A:50.0%, B:35.7%, B×:0.0%, C:0.0%、③模擬授業を通して、内容的条件に着目した授業展開ができる、A○:35.7%, A:64.3%, B:0.0%, B×:0.0%, C:0.0%であり、①単元構造図の作成を通じた授業設計力や俯瞰力について、設定した観点で最もB判定者が多く、次いで②の授業体験を通じた教師行動についてB判定者が多かった。本授業で最も高めたい資質・能力であるが、教育実習前の学生にとってはいずれも難易度が高い課題であると考えられることから、学生の理解と技能が高まるよう手だての改善を検討する必要があると考えられる。

2. 評価規準の実現状況(Cゾーン)と学習の流れ(B-1ゾーン)の整合性

大学版単元構造図(設計)において学生の評価規準の実現状況(表9)も全ての学生が概ね満足と判断される状況であることから、学習の流れは、一応の効果が得られる学習の流れであると考えられる。

しかしながら、最終回が協力校の授業進行の関係から学内模擬授業のみとなったことについて、さらに改善を検討する必要がある。

3. 指導機会のタイミングと学習の流れの順序性の整合性 (B-1, B-2, B-3ゾーン)

単元構造図作成 (設計), 学内模擬授業, 体験授業, 省察及び修正点に基づく単元構造図作成 (新たな設計) のサイクルの学習の流れを組み込んだことで, 単元設計の時間及び教材化検討の期間に配当する時間が短くなった。一方, 技能的領域で求める①授業設計力, 俯瞰力, ②教師行動, ③授業修正力についての指導時間に多くの時間が配当できたが, 情意的領域で求めたい, 教師としての信念や情熱の醸成, 認知的領域における内省力の育成等ための時間の十分な保証が難しいことから, 情意的領域, 認知的領域については, グループワークを通じた協働的な学びのスタイルの工夫と ICT 活用による映像視聴による分析を採用した。これらの方法及び効果については, さらに効果的なアプローチの可能性を検討する必要がある。

4. 単元全体を見通した修正の必要性 (A, B, C ゾーン)

本研究で求めた体験学習サイクルは, 15回の授業では3.5回となっていることから, 4サイクルとするための修正を検討する必要がある。また, 体育授業については, 危機管理等の健康・安全の確保が求められる。学習指導案作成時には最重要事項として指導はしているが, 評価規準として設定していないことから, 基本的な指導技術のひとつとして設定する必要がある。

Ⅳ. まとめと課題

本システムは, これまで述べてきた取り組みから, 松下 (2015) の指摘するアクティブ・ラーニングの一般的特徴として挙げた「学生は, 授業を聴く以上の関わりをしていること, 情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること, 学生は高次の思考 (分析, 総合, 評価) に関わっていること, 学生は活動に関与していること, 学生が自分自身の態度や価値観を探究するこ

とに重きが置かれていること, 認知プロセスの外化を伴うことなど」の要件を満たすアクティブ・ラーニング型の要件を満たしたものと言える。

アンケート結果から, 「教員になれる気がする」という項目において有意な変化が認められたことから, 本システムにおいて教師を目指す上での肯定感が高まっている。

また, 「単元構造図および授業計画の作成」, 「学内模擬授業」, 「中学校での授業体験」, 「授業映像を視聴」それぞれにおいて高得点が得られたことから, 各サイクルは有効に機能していたものと考えられる。授業全体についての回答においても, 中学校での授業体験を取り入れた保健体育科教育法Ⅳの授業は, 学生自身が有効性や授業を通しての成長を実感し, 今後取り組むべき自己の課題について前向きに捉えている可能性が示唆された。

その上で, 授業づくりについて特に重要であると認識した点において, 「学習指導要領の理解」が重要であると感じている点は, 2013年度に実施した事後アンケート (9項目) の結果と同様であるが, 2014年度では, さらに「生徒の理解」, 「状況に柔軟に対応すること」等の項目に変化が認められた。「状況に柔軟に対応すること」の割合が授業前と比較して授業後に有意に上昇し, 反対に「楽しく行うこと」は授業前と比較して授業後に有意に減少したことから, 授業づくりの本質的な視点に学生の意識が向かったことが伺える。

受講学生の成果 (評価規準の実現状況) の視点から, 教師の省察からは, 情意的領域においては, グループによる協働的作業の充実や映像視聴の際の省察の視点の提示が効果的に作用したものと考えられる。また, 認知的領域において, 自身の課題の発見や仲間の課題への指摘については, 基礎的条件を中心とした省察から, 内容的条件の省察に移行させたことで, 段階的な省察の流れが学生の実現状況により効果を及ぼしたものと考えられる。

一方, 汎用的技能である「単元構造図」, 「授業実践力」については, 学生間のばらつきが見られ

た。アンケートにおいても、授業後に「自分の教授技術の課題の明確化 (61.5%)」が最上位として挙げられたこと、「教育実習への不安が払拭できた」、「授業の省察力が高まった」の項目に有意な低下傾向が見られたことから、教育現場において、自身の納得のいく授業提供の難しさを体験したものと見え、実践的指導力を獲得することが容易なことではないという認識をもてたものと言える。

課題として、情意的領域においては、授業外の学習時間への取り組みへの支援、認知的領域においては、分析的課題を後半に移動させるなどの評価機会の修正、技能的領域においては、単元終了時における汎用的技能の定着状況を図るための事前・事後の教師行動のビデオ撮影とその分析などの評価方法を修正することが挙げられる。

さらに、教師の実践的指導力は、経年における指導経験を積むことで獲得できる技能であることから、15回の授業で保証できるものではないが、教育実習、教育実践演習と続く体系的・系統的な指導内容の検討を通して、実践的指導力の育成方法について検討をする必要がある。

参考文献

- Dewey, J. (1910) *How We Think*. D.C. Heath & Company : Boston.
- 藤田育郎 (2013) よい体育授業に対する認識の育成を目指した模擬授業の成果－授業映像視聴による省察の変容－. 信州大学教育学部研究論集, 6 : 143-152.
- 林綾子, 飯田稔 (2002) アメリカの体験学習理論を取り入れた野外教育指導法について. 野外教育研究, 5(2) : 11-21.
- Kolb, D., Rubin, I., and McIntyre, J. M. (1971) *Organizational Psychology a book of readings*. Prentice-Hall, Inc. : Englewood Cliffs, NJ.
- 小柳和喜雄 (2004) 教師の成長と教員養成におけるアクション・リサーチの潜在力に関する研究. 教育実践総合センター研究紀要, 13 : 83-

92.

松下佳代 (2015) 序章 ディープ・アクティブラーニングへの誘い. 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために. 勁草書房 : 東京, pp.1-27.

文部科学省 (2008) 学士課程教育の構築に向けて. 中央教育審議会答申. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryu/attach/1247211.htm

鬼澤陽子, 藏原三雪, 笹本重子, 山梨雅枝, 岡島彩映 (2012) e-ラーニングの活用による授業省察力育成を目指した大学模擬授業のシステムの構築－学内附属施設との連携を通して－. 日本女子体育大学紀要, 42 : 71-79.

佐藤豊, 石沢順子 (2005) 高等学校における野外教育プログラムの効果－「総合的な学習の時間」に向けて (1)－. 野外教育研究, 8(2) : 45-57.

佐藤豊, 椿ちか子 (2015) 単元構造図, 模擬授業, 映像視聴の連続体験による体育科教員養成授業モデルの検討－鹿屋体育大学における2013年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察から－. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 51 : 11-24.

佐藤豊, 佐野裕 (2004) 高等学校における野外教育の在り方を求めて：「総合的な時間の活用」. 横浜国立大学紀要. I, 教育科学, 6 : 90-107.

津村俊充 (1991) 体験学習と学習ジャーナル－自己理解を深めるために－. 南山短期大学人間関係研究センター紀要「人間関係」, 8 : 159-166.

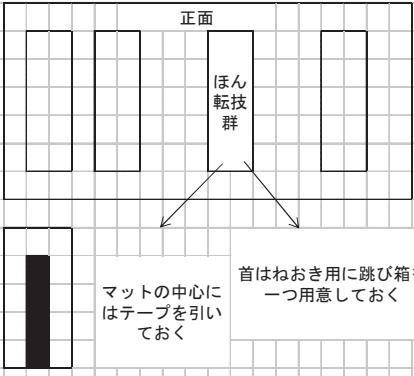
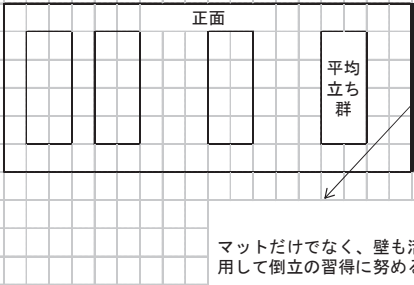
資料1 器械運動：単元構造図(簡易版)作成例

		マット運動の単元構造図 H 中学校 2 年生											
単元目標		(技能)	マット運動では、回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技、発展技を行うこと、それらを組み合わせる										
		(態度)	器械運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、分担した役割を果たそうとすることなどや、健康・安全に気を配ることが										
		(知・思)	器械運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるよ										
1		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11		
オリエンテーション		<p>①健康・安全に留意</p> <p>①関連して高まる体力</p> <p>②中間の学習を援助</p> <p>③良い演技を認める</p>											
10		準備運動→二人組をつくる→グループによる補助運動(股割り、長座開脚・閉脚前屈、股関節、足を後方へ放り出した首のストレッチ、ブリッジ、ゆりかご、補助倒立、倒立3回足たたき、前屈開脚立ち、馬跳び、縄跳び)→授業の説明、出席・体調確認(技などのねらい確認)											
20		<p>①基本的な技を滑らかに回る</p> <p>②中間の良い演技を指摘</p> <p>②基本的な技を発展させて回る、バランスをとり静止</p> <p>③課題に応じた練習方法の選択</p> <p>④構成に適した技の組み合わせを見つける</p>											
30		<p>③条件を変えて回る</p> <p>発表会に向けたグループでの活動(技の構成と技術の確認)</p>											
40		<p>接点グループ(前・後転)(開脚前・後転)</p> <p>ほん転グループ(側方倒立回転、首はねおき)</p> <p>平均立ちグループ(片足正面水平立ち、補助倒立)</p> <p>A、B、Cグループによるローテーション</p> <p>基本的な技を一通り指導</p>											
50		<p>片づけ、整理運動、まとめ</p>											
留意態		①			②					③			
思・判						②				③		④	
技能				①				②				③	
知識													
学習の流れ													
評価													

資料1 器械運動:学習指導案例①

【本時の展開】 (6 / 12 時間)									
(1) 本時の学習の指導内容 (指導の重点)									
< 運動についての思考・判断① >学習する技の合理的な動き方のポイントを見つけている									
(2) 本時の評価内容									
≪ 運動への関心・意欲・態度① ≫									
【技ができる楽しさや喜びを味わい、その技がよりよくできるようにすることに積極的に取り組もうとしている】 (8 / 12 時間)									
≪ 運動についての思考・判断② ≫									
【 仲間と学習する場面で、仲間の良い動きなどを指摘している 】 (6 / 12 時間)									
(3) 展開									
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>生徒の学習内容・活動</th> <th>教師の指導・手立てと評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1、集合、整列、挨拶、出席確認</td> <td>・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する</td> </tr> <tr> <td>2、本時の説明</td> <td>・本時の学習のねらいや授業の進め方を説明する</td> </tr> <tr> <td>3、準備運動、補助運動</td> <td>・準備運動でマット運動に使う体の各部位をストレッチングし、補助運動でマット運動につながる体の動き方を習得する</td> </tr> </tbody> </table>	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価	1、集合、整列、挨拶、出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する	2、本時の説明	・本時の学習のねらいや授業の進め方を説明する	3、準備運動、補助運動	・準備運動でマット運動に使う体の各部位をストレッチングし、補助運動でマット運動につながる体の動き方を習得する
生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価								
1、集合、整列、挨拶、出席確認	・生徒の出席確認を行い、生徒の健康状態を把握する								
2、本時の説明	・本時の学習のねらいや授業の進め方を説明する								
3、準備運動、補助運動	・準備運動でマット運動に使う体の各部位をストレッチングし、補助運動でマット運動につながる体の動き方を習得する								
はじめ 20 分	<p>【学習内容】 < 運動についての思考・判断① >学習する技の合理的な動き方のポイントを見つけている</p> <p>1 活動 (本時の学習の指導内容に即した活動)</p> <p>Aグループ</p> <p>接点技群 (担当 ○○、○○、○○、○○)</p> <p>前転→開脚前転 後転→開脚後転→伸膝後転</p> <p>指導工夫 後転や開脚前転・後転の際、技能の段階に応じて重ねマットや坂マットを使用する</p> <div style="text-align: center;"> </div> <p>前転～伸膝後転まで 坂マットを作り、後転や開脚前転・後転の段階的指導</p>								
なか 20 分	<p>前転と後転から始めさせる。 その後、開脚前転・後転に移行。 ここまでの基本技は美しくできることに重点を置くポイント(順次接地、回転力を高める)</p> <p>個人の段階に応じて、坂マットの利用や、補助を活用し、効率的技の習得に努める</p> <p>タブレットの使用 互いに撮影し、指摘しあいながら、技術の向上に努める</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 学習ノートを活用しながら、生徒同士が評価し、アドバイスをを行う </div> <p>評価ポイント 仲間と学習する場面で、仲間の良い動きなどを指摘しようとしている</p>								

資料1 器械運動: 学習指導案例②

<p>なか 20 分</p>	<p>Bグループ ほん転グループ (担当 ○○、○○、○○、○○)</p> <p>側方倒立回転 首はねおき 指導工夫 (側方倒立回転)</p> <p>マットの中心にテープを引き、それに沿って手、脚を順に接地させ、まっすぐ回ることを意識させる (首はねおき)</p> <p>跳び箱を用意し、その段差を利用してはねおきの感覚を習得させる</p>  <p>Cグループ 平均立ち群 (担当 ○○、○○、○○)</p> <p>片足正面水平立ち 倒立 倒立前転 指導工夫 倒立においては、補助倒立、壁倒立を活用しながら、段階的な指導を行う</p> 	<p>この二つの技は個人差が出やすい技である。できないポイントを見極めながら、個別指導も行う</p> <p>側方倒立回転 足が真上に上がらない場合、補助倒立を取り入れたり、手や足の着く位置を確認したりする</p> <p>ポイント (回転力を高める 起き上がりやすくする動き方) タブレットの使用 互いに撮影し、指摘しあいながら、技術の向上に努める</p> <p>学習ノートを活用しながら、生徒同士が評価し、アドバイスをを行う</p> <p>評価ポイント 仲間と学習する場面で、仲間の良い動きなどを指摘しようとしている</p> <p>片足正面水平立ちにおいては特に美しさを重視する倒立においては、個人差に応じて、補助倒立や壁倒立も活用する。倒立ができるものは倒立前転にも挑戦させる。</p> <p>ポイント (バランスを保つための力の入れ方 バランスが崩れた時の復元力)</p> <p>タブレットの使用 互いに撮影し、指摘しあいながら、技術の向上に努める</p> <p>学習ノートを活用しながら、生徒同士が評価し、アドバイスをを行う</p> <p>評価ポイント 仲間と学習する場面で、仲間の良い動きなどを指摘しようとしている</p>
	<p>まとめ 10 分</p>	<p>3活動(本時の学習の指導内容・評価内容に即した活動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習を振り返る ・ 学習ノートの記入 ・ 次回の確認

資料1 器械運動:学習ノート例

学習ノート

本時のねらい 基本技を美しく、発展技にも挑戦しよう

～仲間同士でよい動きなど指摘し合おう～

指導のポイント		年	組	名前	
わざ	局面	ポイント	自己評価 ◎○△×	ペアの人からのアドバイ ス	
接点技群 (背中をマットに接して回転する)	前転	1、高い腰の位置から手をつけて、回転を始めることができる	2、腰を伸ばしながら回転し、膝を曲げて回転速度を速めることができる		
	後転	1、踵に近いところに腰を下ろすことができる	2、マットを手でしっかりと支え、腰を伸ばしながら回転することができる	3、足を素早く振り下ろし、手で強くマットを押しして立ち上がることができる	
	開脚前転	1、勢いよく膝を伸ばしながら大きく転がること	2、踵がマットにつく直前に開脚することができる	3、手で体を支え、マットを突き放して立ち上がることができる	
	開脚後転	1、スムーズに後転に入ることができる	2、手でしっかり支え、後ろに足を突き出して、頭越しをしながら回転することができる	3、足を素早く振り下ろし、手で強くマットを押しして立ち上がることができる	
	伸膝後転	1、前転しながら倒れ始め、マットにつく直前に腰を起こすことができる	2、膝を伸ばしたまま足を引き寄せ、頭越しに合わせて腰を素早く伸ばして足をマットにつけることができる	3、両膝を伸ばしたまま、素早く足を振り下ろして、手でマットを強く押しして立ち上がることができる	
	ほん転技群 (手や足の支えで回転する)	側方倒立回転	1、1/4ひねりながら着手することができる	2、腰をまっすぐ伸ばし開脚しながら回転することができる	
首はねおき		1、両手、首、肩で上体を支え、両足を大きく振り上げる	2、両足の旋回の勢いを利用して踵で小さく円を描くように引き付け、上体を跳ね上げる	3、着地と同時に上体を引き起こす	
平均立ち群	片足正面水平立ち	1、肩幅に足を開き、片足に重心をかけながらゆっくりとした動作で片足立ちで体を倒す	2、腕、体、脚が水平になるまで倒し、静止する		
	倒立	1、手を肩幅程度に開き、指は軽く開く	2、腕はしっかりと伸ばす	3、手首、肩、足先が一直線になる姿勢を保持する	
	倒立前転	1、倒立後、足先から徐々に15cm前方に体を倒すことができる	2、肘を徐々に曲げながら、後頭部で軽く支え、肩一背中一腰の順番で回ることができる	3、スムーズに回転速度を上げながら、立ち上がることができる	
感想					

資料1 器械運動：リフレクションレポート例① 6/15回作成

模擬授業評価シート①

平成 26 年 11 月 23 日 学籍番号 (000) 氏名 () (〇) 班

課題： 模擬授業の映像を見て、授業者（教師役）の①声の大きさ、②視線・表情、③指示・説明 について、評価してみましょう。

	評価	原因	改善策	その他気づいた点
声の大きさ	教師役の声で生徒の視線を集めていたと思う。ただ、今回の授業ではグループ学習のため他のグループからの声も聞こえてくる。その声を聞いて自分の声の大きさを調整していたかと言われれば疑問である。	もともと特徴のあるハスキーな声のため生徒の注目を集めやすい。声の大きさも人数に対しては良かったが周りに聞いていたためもう少し声を大きくしても良かった。	他のグループの教師役と相離して話す時間を少しずつ変えるか話す位置、方向を変える。また、声の大きさを合わせるなどの教師役とのコミュニケーションがもっと必要だと感じた。	先ほどにも伝達したが、声などに特徴があると生徒に注目されやすい。自分も普段の時の声と変えて、生徒の視線をひきつけたい。
視線・表情	生徒一人一人の顔を見ていたと思う。ただ、顔を上げるだけでなく視線を変化させることは効果的。表情は、最初は少し緊張していることは伝わったが三回目にはリラックスした表情をしていた。	視線を変化させて多くの生徒と目を合わせることによって生徒に緊張感が生まれ、自然と教師を見るようになる。また、表情に余裕がないと生徒に不安が生まれるので、常に余裕を持ちたい。	視線は非常に良かった。今回は何も持っていなかったが、もし、何か資料を持っていた場合、その資料をなるべく見ない努力が必要。表情に関しては、経験が必要。このような機会を多く経験し慣れることが一番大切。	表情について、今まで自分が関わっていた教師の中で、表情に余裕がない教師は良い授業が作れていなかった。授業計画の前に表情、視線、声など教師として一番大切なスキルを上げていきたい。
指示・説明	少し難しい表現があった気がしたが、内容は短く要点がまとまっていて大学生に対しては良かったが中学生に対してはもう少し言葉を砕いた説明をした方が良かった。	大学生の私たちがただ簡単に感じる言葉でも7歳離れている中学生にとっては難しい言葉かもしれない。また、中学生でも1年生と3年生では大きな違いがあるので、そこでも注意が必要。	中学生の教科書をもう一度、読み返すことは効果的かもしれない。教科書にはその年代に適した表現で記されているので参考になると思う。	難しい表現について、現場では違和感がなかった。しかし、ビデオで見たときや、校長先生の感想を聞いたとき考えて見ればそうかもしれないと思った。

<模擬授業を行ってみて and 模擬授業を受講して、全体を通しての感想>

最初の説明が少し問題だったと思う。全員を前にして表情がかなり緊張していた。その緊張が生徒にも移り最初はお互い硬かったと思う。また、説明の内容も少し緊張から重複し少しわかりにくかったと思う。練習ではできていたことが本番ではできない。これは当然なことでは本番を多く経験する必要があると思った。また、安全面について首はね起きの練習は少し危険な気がした。練習で大学生は問題なくできたが体格や運動能力が全く違う中学生に大怪我のリスクがある練習は避けた方が良いと思う。また、少しずつ難易度をあげていく方が良いと感じた。体育の授業で一番大切なことは「安全」ということを身を持って実感した。

資料1 器械運動：リフレクションレポート例② 6/15回作成

器械運動リフレクションシート	
<p>本時のねらい</p> <p>《 運動への関心・意欲・態度① 》</p> <p>【 技ができる楽しさや喜びを味わい、その技がよりよくできるようにすることに積極的に取り組もうとしている】 (8 / 1 2 時間)</p> <p>《 運動についての思考・判断② 》</p> <p>【 仲間と学習する場面で、仲間の良い動きなどを指摘している 】 (6 / 1 2 時間)</p>	
<p>① 本時のねらいを理解し、そのねらいに向けて取り組むことができたか。</p> <p>(理解の状況、指導場面の動きかけ、教材や介入の修正等について振り返る)</p>	<p>修正すべき点</p> <p>ビデオ学習に関して、男子生徒は積極的な参加してくれなかったが、女子生徒は全く参加してもらえなかった。思春期であるこの時期にビデオを取られる恥ずかしさを私は考えていなかった。これからビデオ学習をするときはどの生徒も積極的に参加してもらえよう工夫しなければならぬ。例えば、半強制にはなるが、学習シートに自分の演技を見て、感想や改善点を書かせることで自分の演技を見るきっかけを作ることなどを行っていきたい。</p>
<p>② 指導の計画へのリフレクション</p> <p>次ページの計画と実際の授業のずれを振り返って検証してください。</p>	<p>次回への対応策 (計画の修正、自身の修正)</p> <p>生徒の反応によりいくつかのパターンを持つことが大切。もし、今回、5分間で教えることが前もって分かっていたら、もっと良い指導が出来ていたかもしれない。いくつかのパターンを持つためには、イメージトレーニングが必要。生徒の態度や集中力によって内容をいくつかに変えられるよう授業準備をしていきたい。</p>

資料2 保健:学習指導事例①

保健体育科 学習指導と評価の計画 (保健)																													
【単元計画】			実習者 ○○、○○、○○、○○																										
1	単元名	第3学年 保健分野 エ 感染症の予防 (3時間配当)																											
2	対象	H 中学校3年生男女21名																											
3	期間	2014年12月8日(月)																											
4	場所	3階教室																											
5	学習指導要領の内容	エ 感染症は、病原体が主な要因となって発生すること。また、感染症の多くは、発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めることによって予防できること。																											
6	単元の目標	<p>(1) 感染症や感染症の予防について、関心をもち、学習活動に意欲的に取り組むことができるようにする。[健康・安全への関心・意欲・態度]</p> <p>(2) 感染症や感染症の予防について、課題の解決を目指して、知識を活用する学習活動などにより、総合的に考え、判断し、それらを表すことができるようにする。[健康・安全についての思考・判断]</p> <p>(3) 感染症や感染症の予防、エイズ及び性感染症について課題の解決に役立つ基礎的な事項及びそれらと生活や社会のかかわりを理解することができるようにする。[健康・安全についての知識・理解]</p>																											
7	単元の評価規準	<table border="1"> <thead> <tr> <th>健康・安全への関心・意欲・態度</th> <th>健康・安全についての思考・判断</th> <th colspan="2">健康・安全についての知識・理解</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① 感染症や感染症予防について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。</td> <td>① 感染症や感染症予防について、資料等で調べたことを基に、課題を見付けたり、整理したりするなどして、筋道を立ててそれらを説明している。</td> <td>① 感染症は、病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体、自然環境、社会環境、主体の抵抗力や栄養状態などの条件が相互の複雑に関係し感染症が発病することについて、言ったり、書き出したりしている。</td> <td>② 感染症予防には発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めることについて、言ったり、書き出したりしている。</td> <td>③ エイズ及び性感染症の疾病概念・感染経路を理解できることや、その予防方法を身に付ける必要があることについて言ったり、書き出したりしている。</td> </tr> </tbody> </table>				健康・安全への関心・意欲・態度	健康・安全についての思考・判断	健康・安全についての知識・理解		① 感染症や感染症予防について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	① 感染症や感染症予防について、資料等で調べたことを基に、課題を見付けたり、整理したりするなどして、筋道を立ててそれらを説明している。	① 感染症は、病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体、自然環境、社会環境、主体の抵抗力や栄養状態などの条件が相互の複雑に関係し感染症が発病することについて、言ったり、書き出したりしている。	② 感染症予防には発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めることについて、言ったり、書き出したりしている。	③ エイズ及び性感染症の疾病概念・感染経路を理解できることや、その予防方法を身に付ける必要があることについて言ったり、書き出したりしている。															
健康・安全への関心・意欲・態度	健康・安全についての思考・判断	健康・安全についての知識・理解																											
① 感染症や感染症予防について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	① 感染症や感染症予防について、資料等で調べたことを基に、課題を見付けたり、整理したりするなどして、筋道を立ててそれらを説明している。	① 感染症は、病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体、自然環境、社会環境、主体の抵抗力や栄養状態などの条件が相互の複雑に関係し感染症が発病することについて、言ったり、書き出したりしている。	② 感染症予防には発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めることについて、言ったり、書き出したりしている。	③ エイズ及び性感染症の疾病概念・感染経路を理解できることや、その予防方法を身に付ける必要があることについて言ったり、書き出したりしている。																									
8	指導と評価の計画 (3時間)	<table border="1"> <thead> <tr> <th>時間</th> <th>学習内容</th> <th>使用教科書との関連</th> <th>健康・安全への関心・意欲・態度</th> <th>健康・安全についての思考・判断</th> <th>健康・安全についての知識・理解</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>①</td> <td>感染症は病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体・自然環境社会環境・主体の抵抗力や栄養状態などの条件が複雑に関係し感染症が発病すること</td> <td>大修館書店 「保健体育」 P138～139 10. 感染症の原因</td> <td>①</td> <td></td> <td>①</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>感染症予防には発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めること</td> <td>大修館書店 「保健体育」 P140～141 11. 感染症の予防</td> <td></td> <td>①</td> <td>②</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>エイズ及び性感染症の疾病概念・感染経路を理解できるようにすることや、その予防方法を身に付ける必要があること</td> <td>大修館書店 「保健体育」 P142～145 12. 性感染症・エイズの予防</td> <td></td> <td></td> <td>③</td> </tr> </tbody> </table>				時間	学習内容	使用教科書との関連	健康・安全への関心・意欲・態度	健康・安全についての思考・判断	健康・安全についての知識・理解	①	感染症は病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体・自然環境社会環境・主体の抵抗力や栄養状態などの条件が複雑に関係し感染症が発病すること	大修館書店 「保健体育」 P138～139 10. 感染症の原因	①		①	2	感染症予防には発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めること	大修館書店 「保健体育」 P140～141 11. 感染症の予防		①	②	3	エイズ及び性感染症の疾病概念・感染経路を理解できるようにすることや、その予防方法を身に付ける必要があること	大修館書店 「保健体育」 P142～145 12. 性感染症・エイズの予防			③
時間	学習内容	使用教科書との関連	健康・安全への関心・意欲・態度	健康・安全についての思考・判断	健康・安全についての知識・理解																								
①	感染症は病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体・自然環境社会環境・主体の抵抗力や栄養状態などの条件が複雑に関係し感染症が発病すること	大修館書店 「保健体育」 P138～139 10. 感染症の原因	①		①																								
2	感染症予防には発生源をなくすこと、感染経路を遮断すること、主体の抵抗力を高めること	大修館書店 「保健体育」 P140～141 11. 感染症の予防		①	②																								
3	エイズ及び性感染症の疾病概念・感染経路を理解できるようにすることや、その予防方法を身に付ける必要があること	大修館書店 「保健体育」 P142～145 12. 性感染症・エイズの予防			③																								

資料2 保健:学習指導案例②

9 授業の工夫

○前半20分で、I が本時のねらい及び身近な感染症の種類について講義をする。その後、M が病原体の種類と感染の仕方について講義した後、プリントをもとに、各大学生が個別支援に入り、ワーク①とワーク②を行い、感染症の理解を深める。まとめを、M が行い、適切な対策を講じることで感染症が予防できることを伝える。

【本時の展開】(1/3時間)

(1) 本時の学習のねらい

<感染症や感染症予防について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換するなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。> 健康・安全への関心・意欲・態度 ①

<感染症は、病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体、自然環境、社会環境、主体の抵抗力や栄養状態などの条件が相互の複雑に関係し感染症が発病することについて、言ったり、書き出したりしている。>健康・安全についての知識・理解 ①

(2) 展開

指導内容	関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解	評価・支援
<p>つかむ 20分</p> <p>感染症は、病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること</p> <p>ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感染症を防ぐために感染症とはなにかを理解する ・病原体の種類・感染のしかたを理解する 	<p>発問1</p> <p>感染症にはどのような種類があるか?</p> <p>発問2</p> <p>病原体の正体はなんだろう。また、感染はどのように広がるだろうか?</p>		<p>板書1</p> <p>生徒の回答+教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インフルエンザ ・風邪 ・はしか ・風疹・・・ <p>感染症は病原体が環境を通じて感染すること</p> <p>板書2</p> <p>生徒の回答+教材</p> <p><種類>ウイルス・細菌</p> <p><方法>直接、間接、飛沫</p>	<p>I (10分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・答えやすい発問を通して興味を広げる ・板書を配布プリントに記載させる。 ・プリントの記入を通して強調する。 <p>M (10分)</p> <p><強調></p> <ul style="list-style-type: none"> ・病原体には、細菌・ウイルスがあること ・感染方法は病原体で異なること
<p>深める 20分</p> <p>感染症とは、病原体、自然環境、社会環境、主体の抵抗力や栄養状態などの条件が相互に複雑に関係し感染症が発病すること</p> <p>↓</p> <p>40分</p>	<p>ねらい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習した病原体の種類や広がり方の知識を活用して、身近な感染症に当てはめて考える ・発病のリスク要因を考えることで、予防方法について見通しを立てる 	<p>ワーク①10分</p> <p><大学生のアドバイスを参考に感染症例のプリントに、病原体の種類、感染のしかたを記入する></p> <p>ワーク②10分</p> <p>どんな時に感染症にかかりやすくなるか考えてみよう</p>	<p>生徒2人に1人~2人の大学生が個別支援する</p> <p>各感染症の種類ごとに、病原体の種類、感染の仕方が異なること</p> <p>感染症は、主体と環境、病原体の種類などの条件によって発病すること</p>	<p>発問、クイズ方式で、表を完成させる</p> <p>病原体、自然環境、社会環境、抵抗力、栄養状態などのキーワードが出るよう追加発問を行う</p> <p>●<関・意・態 ①></p> <p>ワーク時の取り組み状況の観察</p> <p>T 10分</p> <p><知・理①></p> <p>プリントの記述状況</p>
<p>確認する</p> <p>まとめ 10分</p> <p>50分</p>			<p>① 諸条件が相互に関連し、感染症が発生すること</p> <p>② 適切な対策を講ずることによって感染症が予防できる可能性があること</p>	

資料2 保健：学習ノート例

保健<感染症の原因> 年 組 番 氏名

感染症 → ① が ② を通じて感染する。

病原体の種類	①	②
大きさ	小さい	大きい
増殖するとき	人や動物などの細胞の中で増える	細胞がなくても増える
特徴	抗生物質が効きにくい	抗生物質が効きやすい

感染のしかた・・・どのように感染するでしょうか。

感染症の例

病名	病原体（細菌・ウイルス）	感染のしかた(直接、間接、飛沫)
インフルエンザ		
ノロウイルス		
麻疹（はしか）		
風しん		
コレラ		
結核		
エボラ出血熱		

感染の要因・・・感染症にかかる時、何が影響しているのだろうか。

感染症は① ② ③ ④ ⑤

などの条件が相互に複雑に関係し発病します。

まとめ

→ 病原体を理解し、適切な対策を講じることで感染症は予防できるよ。

資料2 保健:学習ノート例(解答)

<感染症の原因> 解答 年 組 氏名

感染症 → ①病原体 が ②環境 を通じて感染する。 M 板書

病原体の種類	① ウイルス	② 細菌
大きさ	②より小さい	①より大きい
増殖するとき	人や動物などの細胞の中で増える	細胞がなくても増える
特徴	抗生物質が効きにくい	抗生物質が効きやすい

感染のしかた・・・どのように感染するでしょうか。

直接感染、間接感染、飛沫感染

感染症の例

病名	病原体(細菌・ウイルス)	感染のしかた
インフルエンザ	ウイルス	飛沫感染
ノロウイルス	ウイルス	間接感染
麻疹(はしか)	ウイルス	飛沫感染
風しん	ウイルス	飛沫感染
コレラ	細菌	間接感染
結核	細菌	飛沫感染
エボラ出血熱	ウイルス	直接感染

I 板書 ワーク①個別支援で完成

感染の要因・・・感染症にかかる時、何が影響しているのだろうか。

<大学生の発問例>
 コレラは、どこで流行しているかな?・・・自然環境
 下水道が整備されたら感染症が減った・・・社会環境
 どんな時に風邪を引きやすい?・・・睡眠不足、体が弱っているとき・・・抵抗力(睡眠、休養、運動)、栄養、などのやりとりで、主体と環境の関係によって感染症が引き起こされていくことに気づかせる
 ・知っておくことで感染症の予防に役立つことを伝えながら、意欲を高める。

ワーク②個別支援で検討
 生徒の言葉で良い

感染症は病原体、自然環境、社会環境、抵抗力、栄養状態などの条件が相互に複雑に関係し発病する。

資料2 保健：リフレクシオンレポート例① 9/15回作成

模擬授業評価シート②

平成 26年 12月 8日 学籍番号 (000) 氏名 (000 000) (〇) 班

課題1 : 12月8日(月)の模擬授業の映像を見て、授業者(教師役)の①発問、②応答、③助言、④観察・巡回、⑤生徒への対応について、評価してみましょう。

	評価	原因	改善策	その他気づいた点
発問	3人とも生徒に興味を持ってもらえようように、できるだけ発問を多く投げかけ考えさせていたと思う。Iの感染症の種類に関しては、最後のほう生徒が例を思いついていなかった。	感染症の種類が思い浮かばなかったときに、生徒に上手くアプローチができていなかったこと。上手く答えに導いてやれなかったこと	上手く感染症に関するヒントを出してあげることとで、生徒もイメージしやすく答えに繋がると思う。また、種類の7つ全てを生徒に質問するのはなく、教師側がいくつか例を挙げながら質問していくことが大切であると思う。	Mが細菌とウイルスの違いについて生徒に挙手させていたのは良かったと感じた。Tは、上手く生徒とコミュニケーションを取りながら授業を展開していたと思う。
応答	3人とも笑顔で生徒の目を見て応答できていたと思う。Iの最初の中学校の思い出のところでは、もう少し丁寧に答えたほうがよかった。Tは、笑顔と声の強弱のつけ方が上手いと感じた。	時間を気にして焦って早口に話していたことがあったからだと感じた。Iは生徒が興味を持つような授業ができていなかったと思う。	ただ、淡々と感染症の特徴やその症状を説明していくのではなく、新聞記事やほかに資料も使いながら、もう少し軽い雰囲気や授業を展開していくことが大切であると思う。	Mは生徒の挙手や返事に対して柔軟に対応していたと感じた。先生の応答の仕方一つで生徒にも笑顔が出てくると知った。
助言	中の20分に関しては、それぞれがよいアドバイスをしていたと思う。その結果が最後のTが行ったまとめの10分に現れていたと感じた。なかには20分まで予定通り教えきれない学生もいた。	思ったよりも20分が短く、前置きや一つの説明に時間を取りすぎたからだと感じる。2人の生徒の理解の状況を捉えていないという点もあつたと感じる。	2人の生徒の理解の状況を的確に判断して、効率よく時には質問しながら授業をすることが大切であると感じた。また、この内容はここまでの時間で終わらすといった目安を定めることも有効であると思う。	中の20分が上手くいったことで最後の10分にしっかりと復習ができていたと思う。Tは、病原体はどこにいるのかを分かりやすく説明していたと感じた。
観察・巡回	3人の先生全員が巡回はしていないかったが、生徒にまんべんなく質問をしていたと思う。Mは生徒の理解の習熟度に合わせて説明を付け加えたりしていたので良かった。	板書をすることが多かったので、後ろのほうまで巡回することができなかつた。生徒に発問する際も3人とも黒板の前から離れていなかった。	発問をした際にはその指名した生徒の近くまで行き、頷いたり笑顔で応答することが大切であると感じた。生徒と上手くコミュニケーションを取るために、ずっと黒板の前で話すのは好ましくないと思う。	中の20分では個人指導ということもあり生徒と上手くコミュニケーションを取っていたが、生徒の目線に合わせて、立ったまま指導をしている先生もいた。
生徒への対応	3人の先生とも生徒の返事に対して、「そうだね。その通り」などと生徒を褒めながら授業をしていた。Iに関しては、生徒の答えへのアプローチが上手くできていなかったと思う。	ただ淡々と感染症の種類やその症状を説明し、生徒への対応が、親身になっていなかった。ただ、板書するだけになってしまったと感じた。	冗談やちよつとした世間話や雑学的な話を取り入れられることで、生徒に興味関心を持ってもらえるようになると思う。あまり焦らず、ゆっくりと授業をしていくことで、生徒への対応もしつかりとできると感じた。	Tは、発問の生徒の返事に対し、笑いも取りながら、上手く授業ができていたと思う。Mも生徒に対して柔軟に対応できていたと感じた。

資料2 保健：リフレクシオンレポート例② 9/15回作成

保健リフレクシオン・シート			
<p>【本時の展開】 (1/3時間) ・本時の学習のねらい <感染症や感染症予防について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換するなどの学習活動に意欲的に取り組もうとしている。> 健康・安全への関心・意欲・態度 ① <感染症は、病原体が環境を通じて感染することであり、適切な対策を講ずることによって予防できること、病原体、自然環境、社会環境、主体の抵抗力や栄養状態などの条件が相互の複雑に関係し感染症が発病することについて、書き出したりしている。> 健康・安全についての知識・理解 ①</p>			
①	本時のねらいを理解し、そのねらいに向けて取り組むことができたか。 (理解の状況、指導場面での動きかけ、教材や介入の修正等について振り返る)	自身の取り組みでよかった点、達成できた点 ・ 10分程度で終わらずに最後までできたこと ・ 最初の日常的な話から感染症の授業に繋げることができたこと ・ 一つ一つその感染症について説明できたこと ・ 声の大きさが後ろまで通っていたこと ・ 中の20分で効率よく教えることができて、コミュニケーションを取ることができたこと ・ 声の大きさが適当であったこと	修正すべき点 ・ 緊張もあり、すべてに対して余裕が感じられなかったこと ・ 板書の字が小さかったこと ・ 生徒の返事から上手く話を広げられなかったこと ・ 生徒の興味関心を引き付けられなかったこと ・ 後ろまで巡回できなかったこと ・ 板書だけであって、新聞記事やほかの教材を上手く使えなかったこと ・ くそまじめすぎて面白い授業が展開できなかったこと。
②	指導の計画へのリフレクシオン 次ページの計画と実際の授業のずれを振り返って検証してください。	計画と実際で異なった点 ・ 特に大きく異なった点はなかったが、中の20分で2人で授業をしたこと ・ 緊張から早く話してしまったこと ・ 余裕がなかったこと	次回の対応策 (計画の修正、自身の修正) ・ 生徒が食いついてくるような話題を投げかけること ・ 生徒の表情を確認しながら、ゆっくりと説明していく ・ キーワードである言葉に関して新聞記事や様々な教材を用意して生徒の興味関心を引かせる
		次回の対応策 ・ もう少し経験を重ねて自分に自信を持って授業ができるようにする ・ 実際に板書してみて、後ろからでも見えるのかを確認し、字を大きく書く癖をつける ・ 生徒の返事から上手く話を広げられるように、日ごろから、友達の話から話を広げていけるような練習をする ・ そのキーワードに共通する新聞記事や教材を探し活用する。 ・ 冗談や世間話などを取り入れながら、生徒に興味関心を持ってもらえるような授業展開をする。	

資料2 保健：リフレクシオンレポート例③ 9/15回作成

<模擬授業全体を通しての自身の感想、気づき等>・・・ H 中学校に提出します。

今回、実習という形だが、先生として人生で初めて教壇に立って授業をした。本番を迎える前から、いかに楽しく、笑顔の多い授業にすることができるといふことを考えて授業の構想を練った。器械運動、保健、バスケットボールの中から模擬授業を選ぶことができたが、私は迷わずに保健を選んだ。実技とは違った、独特な緊張感の中で生徒の視線を感じながら、堂々と面白く、分かりやすい授業を作りたかったからである。

そして8日に実際に中学3年生に授業をしたが、言いたかったこと全てを言うことができず、面白くない淡々とした授業をしてしまったことが最大の反省点であると感じた。⁵ 先生もおっしゃっていたが、教科書を教えることは誰だつてでき良い先生とは言わない、いかに教科書で教えられるかが先生の資質である。本当にそう感じる事ができた模範授業となった。自分自身の緊張をほぐすことも兼ね日常的な会話から授業をし、生徒とコミュニケーションを図ることができたが、時間を気にしていたというところもあり、授業に入ってからには感染症とは何かについて発問し、ただ板書していくだけの一方的な授業になってしまい、生徒から笑顔や興味関心を引きつけることはできなかつた。私は模範授業の本番前までは、10分が長く絶対に時間が余ると思っていたが、練習をすすると思つたよりも短くいかに10分で生徒に興味を持ってもらえらるような授業を展開することが大切であるかということをも身に以て知ることができた。感染症にはどのようなものがありますか？の発問に関しては最初は生徒もインフルエンザやノロウイルス、はしかなど積極的に答えていたが、例が多く出ていくにつれ、生徒も答えづらくなつていった。そこで私は生徒に上手くアドバイスや答えへのアプローチができていないかと感じた。また、実際に授業をしているときは字を大きく書いたつもりだったが、^Mと交代した際に改めて自分の字を見ると、かなり小さく、後ろからは見えづらいつつ、自分が思っていた字の大きさよりも実際は小さいということを知ることができたので、これから修正していく。中の20分では、先に板書してあった主な症状を見て、それが直接感染、間接感染、飛沫感染のどれにあたるのかということを考えさせることができたと思う。感染症は、病原体、自然環境、社会環境、抵抗力、栄養状態が関係するということを資料を使い例を交えながら教えることができた。ただ、もう少し話題を広げ、生徒にわかりやすく理解してもらえらるような授業は作れていたと感じた。そして、最後の10分は^Tが担当したが、ユニークで生徒の笑顔も取りながら、楽しい授業になっていたと感じた。その時私は、やはり授業が楽しいと先生も生徒も楽しく授業をすることができ、生徒の知識の定着もできると思つた。面白く分かりやすい授業を展開することできる先生が私の理想とする教員像である。

今回の模範授業で、理想とする教員像と現段階の自分を比べ、かなりの差を感じたし、授業の構成員、トーク力、生徒の興味関心を上手く引き付けられる力、飽きない授業展開をするなどのあらゆる面において課題を見つけた。この保健の授業を担当することができて本当に私は幸せであると思つた。教師力を磨くにはやはり現場に出ることが一番効果的であると感じている。今回の授業をしっかりと分析・反省・改善し、模範授業をさせていただいた中学校の先生方に感謝して、教師について勉強していく。

資料3 バスケットボール：学習指導案例①

保健体育科（体育 運動に関する領域）学習指導と評価の計画案 フォーマット			
【単元計画】			
1	単元名 入学年次（第1学年） E 球技（ゴール型：バスケットボール）		
2	対 象 組 35名（男子：15名、女子20名）		
3	期 間 平成27年 1月 26日（月）		
4	場 所 H 中学校体育館		
5	学習指導要領の内容及び単元の目標		
	(1) 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームが展開できるようにする。 ア ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防を展開すること。		
	(2) 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、分担した役割を果たそうとすること、		
	(3) 球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。		
6	単元の指導内容及び評価規準		
	指導内容		
	＜技能＞	＜態度＞	＜知識＞
	ボール操作 ①ゴール方向に守備者がいない位置でシュートすることができる。 ②マークされていない味方にパスを出すことができる。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができる。 ・パスやドリブルなどでボールをキープすることができる。 ボールを持たないときの動き ・ボールとゴールが同時に見える場所に立つことができる。 ③パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くことができる。 ・ボールを持っている相手をマークすることができる。	①球技バスケットボールの授業に積極的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを守ろうとしている。 ・分担した役割を果たそうとしている。 ・話し合いに参加しようとしている。 ②仲間の学習を援助しようとしている。 ③健康・安全に気を配ろうとしている。	①バスケットボールの特性や成り立ちについて、言ったり書きだしたりしている。 ②バスケットボールの技術の名称や行い方について、言ったり書きだしたりしている。 ③バスケットボールによる関連して高まる体力について、学習した具体例を挙げている。 ・バスケットボールの試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。
			＜思考・判断＞
			①ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付ける時のための運動の行い方のポイントを見付けている。 ・自己やチームの課題を見付けている。 ②提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。 ・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けている。 ③学習した安全上の留意点を他の練習場面や試合場面に当てはめている。
	評価規準		
	《技能》 【観察】	《関心・意欲・態度》 【観察】	《知識・理解》 【観察】【ノート】
	～ができる	～しようとしている (～いる)	～について、学習した具体例を挙げている ～について、言ったり書き出したりしている
			《思考・判断》 【観察】【ノート】
			～している

資料3 バasketボール:学習指導事例②

7 学習の流れ・指導と評価の計画																					
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20																					
共通メニュー (準備運動、今日の学習内容の確認)																					
共通メニュー(ボール慣れ)																					
オリエンテーション	バス(チェストパス、バウンドパス、サイドハンドパス、シールドパス)		ドリブル練習		ピポット練習(ジャンプストップ、ストライドストップ)		オフエンス練習(ピポット、パスや)		セットシュート		レイアップシュート		ディフェンス練習		課題別練習		班別リーグ戦				
	シュートゲーム		シュートゲーム I		シュートゲーム II		1対1・2対1の攻防		2対1・3対2の攻		3対3・5対4の攻		5対5の攻防・課題確認								
	・バスリレー ・ドリブル相撲 ・ドリブルリレー																				
共通メニュー (整理運動、振り返り、次回課題等)																					
時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	総
指導内容	技能					①		①		③	②										
	関心意欲態度	①				②							③								
	知識理解			①					③			②									
	思考判断						①								②			③			
評価内容	技能												①		②		③				
	関心意欲態度				①			②							③						
	知識理解			①					③			②									
	思考判断						①								②			③			
8 学習指導の工夫																					
(1) 学習の流れの工夫																					
・ 単元前半で、基礎的・基本的な技能の習得をめざし、単元後半では、仲間との連携やチームでの課題練習を行うようにする。																					
(2) 場の工夫																					
・ ゴールを使わずに学習課題を行い、動き方をより理解できるようにする。 ・ 人数の工夫やハーフコートを活用し、運動課題が再現しやすようにする。																					
(3) 学習資料の工夫																					
・ 学習ノートやグループカードを作成し、思考・判断ができるように工夫する。																					
(4) その他																					
・ 安全について、授業での決まりを作り、守ることができるように指導する。																					

資料3 バスケットボール：学習指導案例③

【本時の展開】（ 8/20時間）									
（1）本時の学習の指導内容（指導の重点）									
<技能①>ゴール方向に守備者がいない位置でシュート（レイアップ・シュート）をすることができる。									
（2）本時の評価内容									
≪関心・意欲・態度②≫仲間の学習を援助しようとしている。【観察】（6/20時間）									
（3）展開									
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>生徒の学習内容・活動</th> <th>教師の指導・手立てと評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> 1 集合・整列・挨拶・出席確認を行う。(M) 2 本時の説明を受ける。 ・技能の学習は、フリーの状態でのシュートの一つであるレイアップ・シュートを学習すること、態度の学習は、話し合いに参加することであることを確認する。 3 準備運動をする。(..K..) ・ランニング(体づくり運動含む) ・徒手体操 ・ボールを使った簡単ドリル ・ボールを使ったミニ遊び </td> <td> 1. 健康状態の把握を確実に。けがに留意するよう伝える。 2. レイアップ・シュートを知っているかを確認する。 学習の流れを説明する際に、態度の評価機会であることを確認する。 【仲間の学習を援助しようとする】 チームの作戦や戦術などの学習課題の解決に向けて仲間に助言したりすることを示し、自己の能力を高めたり、仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動することにつながることを理解。 3. 音楽をかけ、リズムに合わせて走ったり、スキップなどをして体を温めると共に、生徒先生間の緊張をほぐすことを目的とする。 この時補助学生も参加して楽しい雰囲気を作る </td> </tr> <tr> <td> 【学習内容】 ゴール方向に守備者がいない位置でシュート(レイアップ・シュート)するには、リズムよくジャンプする、バックボードの隅をねらう、ボールをゴールに置くように扱うなどのポイントがあること 【ねらい】 レイアップシュートにチャレンジしよう (楽田) 【発問】 レイアップシュートをする際に、どこに気を付ければよいでしょうか。大学生のシュートを分析しよう。 4 実際に、大学生のレイアップシュートを見る。 【発問】 大学生のうまくいっている動きのポイントを挙げてみよう。 予想される回答) ボードの角をねらう。高くジャンプする。 レイアップシュートの行い方を練習する (O) 5 ボールの投げ方を学習する 男子：片手、女子：両手で行う。 ・その場で真上になるべく高く投げる。 ・その場で「右、左、投げる」を行う。 6 ドリブルからのステップの確認(大塚) ・ステップのリズムに気を付けながら、「1.2」のステップを踏む。 ・ボールも1で右、2で左のように足と同じ動きをする。 ・「1.2.ジャンプ」でボールも投げる 【班別に分かれて】 レイアップシュート ・積極的にアドバイスし合いながら行う。 7 試しのシュートゲーム ・班対抗ごとシュートが決まった数又は、リングに当たった数を競う。(1分間。数は、大学生が数える。) 8 班で話し合い(作戦タイム) ・シュートゲームに向けた作戦を立てる。 ・人の意見を聞くだけでなく、自分の意見も述べるようにする。 9 シュートゲーム ・班対抗ごとシュートが決まった数又は、リングに当たった数を競う。(1分間。数は、大学生が数える。) </td> <td> 4. レイアップシュートについてイメージを持たせる。 フリーの状態でのシュートの一つに「レイアップ・シュート」があることを伝える。イラストを示して、レイアップ・シュートのイメージを持たせる。 手立て) イメージがもてない生徒に対しては、大学生の実演をみてイメージが持てるように指示する。 5. ホワイトボードを使い、ポイントの説明する。 ・図を使用する。 ・観点：ステップのリズム、狙う位置、力加減 ・1.2.ジャンプができるようにする。 ・バックボードの白枠の右角をねらう。 ・下からボールを置くようにシュートする。 手だて)力の弱い女子生徒は、両手で行ってもよいことを伝える 5. 「1.2」のリズムでステップを踏むように指導する。(声に出して) ・待機中の生徒は、一緒にリズムをいうように指導する。 6. 各班に大学生がサポートに入る。 ※話し合いは介入しすぎず、観察する。≪関心・意欲・態度③≫ ・大学生が数を数える。 </td> </tr> <tr> <td> 10 整理運動 T 11 本時のまとめ ・積極的に授業の感想を述べる。(発言) ・シュートを決めるためのポイントの確認。(発言) ・協力して話し合いに参加したかの確認(挙手) 12 次回の確認、挨拶 </td> <td> 7. 整理運動 …使った部位を意識して整理運動を行う。 8. 本時のまとめ ・今回の授業の確認をする。 ・生徒の返答から、シュートを決めた時の嬉しさ、仲間と協力する大切さについて説明する。ゴール型スポーツの共通の楽しさとして理解させる。 </td> </tr> </tbody> </table>	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価	1 集合・整列・挨拶・出席確認を行う。(M) 2 本時の説明を受ける。 ・技能の学習は、フリーの状態でのシュートの一つであるレイアップ・シュートを学習すること、態度の学習は、話し合いに参加することであることを確認する。 3 準備運動をする。(..K..) ・ランニング(体づくり運動含む) ・徒手体操 ・ボールを使った簡単ドリル ・ボールを使ったミニ遊び	1. 健康状態の把握を確実に。けがに留意するよう伝える。 2. レイアップ・シュートを知っているかを確認する。 学習の流れを説明する際に、態度の評価機会であることを確認する。 【仲間の学習を援助しようとする】 チームの作戦や戦術などの学習課題の解決に向けて仲間に助言したりすることを示し、自己の能力を高めたり、仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動することにつながることを理解。 3. 音楽をかけ、リズムに合わせて走ったり、スキップなどをして体を温めると共に、生徒先生間の緊張をほぐすことを目的とする。 この時補助学生も参加して楽しい雰囲気を作る	【学習内容】 ゴール方向に守備者がいない位置でシュート(レイアップ・シュート)するには、リズムよくジャンプする、バックボードの隅をねらう、ボールをゴールに置くように扱うなどのポイントがあること 【ねらい】 レイアップシュートにチャレンジしよう (楽田) 【発問】 レイアップシュートをする際に、どこに気を付ければよいでしょうか。大学生のシュートを分析しよう。 4 実際に、大学生のレイアップシュートを見る。 【発問】 大学生のうまくいっている動きのポイントを挙げてみよう。 予想される回答) ボードの角をねらう。高くジャンプする。 レイアップシュートの行い方を練習する (O) 5 ボールの投げ方を学習する 男子：片手、女子：両手で行う。 ・その場で真上になるべく高く投げる。 ・その場で「右、左、投げる」を行う。 6 ドリブルからのステップの確認(大塚) ・ステップのリズムに気を付けながら、「1.2」のステップを踏む。 ・ボールも1で右、2で左のように足と同じ動きをする。 ・「1.2.ジャンプ」でボールも投げる 【班別に分かれて】 レイアップシュート ・積極的にアドバイスし合いながら行う。 7 試しのシュートゲーム ・班対抗ごとシュートが決まった数又は、リングに当たった数を競う。(1分間。数は、大学生が数える。) 8 班で話し合い(作戦タイム) ・シュートゲームに向けた作戦を立てる。 ・人の意見を聞くだけでなく、自分の意見も述べるようにする。 9 シュートゲーム ・班対抗ごとシュートが決まった数又は、リングに当たった数を競う。(1分間。数は、大学生が数える。)	4. レイアップシュートについてイメージを持たせる。 フリーの状態でのシュートの一つに「レイアップ・シュート」があることを伝える。イラストを示して、レイアップ・シュートのイメージを持たせる。 手立て) イメージがもてない生徒に対しては、大学生の実演をみてイメージが持てるように指示する。 5. ホワイトボードを使い、ポイントの説明する。 ・図を使用する。 ・観点：ステップのリズム、狙う位置、力加減 ・1.2.ジャンプができるようにする。 ・バックボードの白枠の右角をねらう。 ・下からボールを置くようにシュートする。 手だて)力の弱い女子生徒は、両手で行ってもよいことを伝える 5. 「1.2」のリズムでステップを踏むように指導する。(声に出して) ・待機中の生徒は、一緒にリズムをいうように指導する。 6. 各班に大学生がサポートに入る。 ※話し合いは介入しすぎず、観察する。≪関心・意欲・態度③≫ ・大学生が数を数える。	10 整理運動 T 11 本時のまとめ ・積極的に授業の感想を述べる。(発言) ・シュートを決めるためのポイントの確認。(発言) ・協力して話し合いに参加したかの確認(挙手) 12 次回の確認、挨拶	7. 整理運動 …使った部位を意識して整理運動を行う。 8. 本時のまとめ ・今回の授業の確認をする。 ・生徒の返答から、シュートを決めた時の嬉しさ、仲間と協力する大切さについて説明する。ゴール型スポーツの共通の楽しさとして理解させる。
生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価								
1 集合・整列・挨拶・出席確認を行う。(M) 2 本時の説明を受ける。 ・技能の学習は、フリーの状態でのシュートの一つであるレイアップ・シュートを学習すること、態度の学習は、話し合いに参加することであることを確認する。 3 準備運動をする。(..K..) ・ランニング(体づくり運動含む) ・徒手体操 ・ボールを使った簡単ドリル ・ボールを使ったミニ遊び	1. 健康状態の把握を確実に。けがに留意するよう伝える。 2. レイアップ・シュートを知っているかを確認する。 学習の流れを説明する際に、態度の評価機会であることを確認する。 【仲間の学習を援助しようとする】 チームの作戦や戦術などの学習課題の解決に向けて仲間に助言したりすることを示し、自己の能力を高めたり、仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動することにつながることを理解。 3. 音楽をかけ、リズムに合わせて走ったり、スキップなどをして体を温めると共に、生徒先生間の緊張をほぐすことを目的とする。 この時補助学生も参加して楽しい雰囲気を作る								
【学習内容】 ゴール方向に守備者がいない位置でシュート(レイアップ・シュート)するには、リズムよくジャンプする、バックボードの隅をねらう、ボールをゴールに置くように扱うなどのポイントがあること 【ねらい】 レイアップシュートにチャレンジしよう (楽田) 【発問】 レイアップシュートをする際に、どこに気を付ければよいでしょうか。大学生のシュートを分析しよう。 4 実際に、大学生のレイアップシュートを見る。 【発問】 大学生のうまくいっている動きのポイントを挙げてみよう。 予想される回答) ボードの角をねらう。高くジャンプする。 レイアップシュートの行い方を練習する (O) 5 ボールの投げ方を学習する 男子：片手、女子：両手で行う。 ・その場で真上になるべく高く投げる。 ・その場で「右、左、投げる」を行う。 6 ドリブルからのステップの確認(大塚) ・ステップのリズムに気を付けながら、「1.2」のステップを踏む。 ・ボールも1で右、2で左のように足と同じ動きをする。 ・「1.2.ジャンプ」でボールも投げる 【班別に分かれて】 レイアップシュート ・積極的にアドバイスし合いながら行う。 7 試しのシュートゲーム ・班対抗ごとシュートが決まった数又は、リングに当たった数を競う。(1分間。数は、大学生が数える。) 8 班で話し合い(作戦タイム) ・シュートゲームに向けた作戦を立てる。 ・人の意見を聞くだけでなく、自分の意見も述べるようにする。 9 シュートゲーム ・班対抗ごとシュートが決まった数又は、リングに当たった数を競う。(1分間。数は、大学生が数える。)	4. レイアップシュートについてイメージを持たせる。 フリーの状態でのシュートの一つに「レイアップ・シュート」があることを伝える。イラストを示して、レイアップ・シュートのイメージを持たせる。 手立て) イメージがもてない生徒に対しては、大学生の実演をみてイメージが持てるように指示する。 5. ホワイトボードを使い、ポイントの説明する。 ・図を使用する。 ・観点：ステップのリズム、狙う位置、力加減 ・1.2.ジャンプができるようにする。 ・バックボードの白枠の右角をねらう。 ・下からボールを置くようにシュートする。 手だて)力の弱い女子生徒は、両手で行ってもよいことを伝える 5. 「1.2」のリズムでステップを踏むように指導する。(声に出して) ・待機中の生徒は、一緒にリズムをいうように指導する。 6. 各班に大学生がサポートに入る。 ※話し合いは介入しすぎず、観察する。≪関心・意欲・態度③≫ ・大学生が数を数える。								
10 整理運動 T 11 本時のまとめ ・積極的に授業の感想を述べる。(発言) ・シュートを決めるためのポイントの確認。(発言) ・協力して話し合いに参加したかの確認(挙手) 12 次回の確認、挨拶	7. 整理運動 …使った部位を意識して整理運動を行う。 8. 本時のまとめ ・今回の授業の確認をする。 ・生徒の返答から、シュートを決めた時の嬉しさ、仲間と協力する大切さについて説明する。ゴール型スポーツの共通の楽しさとして理解させる。								

資料3 バスケットボール:学習ノート例

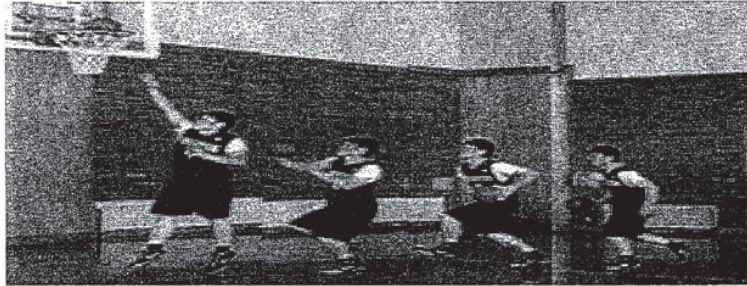
バスケットボール学習カード

2014/01/26 学年 / 氏名

めあて

レイアップシュートにチャレンジしよう!

○レイアップシュート…ドリブルしながらシュートを打つ方法。
セツシュートより、ゴールの確立が高いシュート。



○レイアップシュートのポイントを書き出してみよう!

- ① 1. 2. シュートのステップをバカ打てる。
- ② 黒いわくの角をねらう。
- ③ フワッとしたボールを上げる

○振り返り

①レイアップシュートにおけるポイントがはかできたか。	<input checked="" type="radio"/> できた ・ もう少し ・ あまりできなかった
②グループの話し合いに積極的に参加できたか。	できた ・ <input checked="" type="radio"/> もう少し ・ あまりできなかった
③授業に積極的に参加することができたか。	<input checked="" type="radio"/> できた ・ もう少し ・ あまりできなかった

<感想> 大学生の授業に対する感想を書いてください。

私はあまり体育が得意ではないけど、とても楽しかったです。できないところもしっかり教えてもらって良かったです。ありがとうございました。

資料3 バasketボール:リフレクションレポート例① 13/15回作成

模擬授業評価シート③

平成27年01月26日 学籍番号(000) 氏名(000 000) (〇) 班

課題 : 模擬授業の映像を見て、授業者(教師役)の①教材の選択・活用・工夫 ②発問・応答、③生徒への対応 について、評価してみましょう。

	評価	原因	改善策	その他気づいた点
教材の選択・活用・工夫	教材の選択として、音楽や動画の画像といった親しみやすいものを採用し、授業の始まりから技術練習において楽しく明るく練習できるような雰囲気づくりに取り組んだ。私自身、積極的に声掛けやアドバイスを介して生徒とのコミュニケーションを図り、信頼関係を築こうと努めた。しかし、声掛けやアドバイスに集中するあまり安全面の配慮に目が行き届いていなかったのが致命的だった。機軸や画像を用いた質問、伝え方、そして連続した画像を映した授業の学習カードを工夫した。	実際の現場では、一人一人を指導できる時間だけでなく、一人を見る時間や指導できる時間などないに等しい。その中で一人やひとつのグループのみを見てしまうことは視界が狭まり周りにくくなる状態の状況につながる可能性がある非常に高い。今回の安全面に關する原因は、ずばり目の前のことのみを見ていた、考え抜いたためであるといえる。	視野を広く保つため、まずは全体を見る癖をつける。そのためにまず、全体が見えるポジション、また、生徒から見ても見えやすい位置で指導や観察をする必要がある。練習量を確保し回すスピードを上げることも必要な要素ではあるが、安全面を確保できなくては意味がないので、生徒に安全面の注意を呼びかけるとともに、指導者もそのような意識にならないよう授業展開や指導内容を工夫する必要がある。	授業の流れや時間配分に大きな問題点は感じられなかった。しかし、大勢の学生スタッフがいなかったことが多いので、実際のシチュエーションのことを想定し考え行動しなくてはならないだろう。
発問・応答	一つ一つの生徒の返答に対してしっかりと対応できていた。おどおどした様子もなく事前の準備も各々おこなうできていたと感じた。発問としては、レイアップシートについて、まとめの時間に主に行われ、こちら側がほしい返答にうまく誘導しているシーンも見られた。	声がいさく生徒聞き取りにくいシーンもあったと感じた。教師役の学生の自己満足や自分のペースで説明している場面もあった。	生徒の理解が優先なので、大きな声でかっつくりと、声の高さやスピード、強調なども利用しよりわかりやすい聞き取りやすい内容にしなくてはならない。生徒の表情や眼を見ることから生徒の理解レベルや、頭の中でイメージできているのかを感じ判断しながら授業を進めなくてはならない。	グループでの会話の中で生徒間の協力、協調、自発的・積極的な発言、参加を求めているが、そこでの教師の行動発言の詳細からなかったため、今後はその点についても学び、次に近づけていきたい。
生徒への対応	グループに学生スタッフが3人つくという非現実的な授業展開であった。アップ時の声掛けやアドバイスを生徒が敬らばったセンターで観察するという点はよかった。	しかし、体育館であり、ボールがバウンドしている音も響いて大きくなっていったので、より聞き取りにくい状況となっていた。そしてそこに話すスピードが速くポイントが分かりづらくなると、時間を消費して説明してもそれに見合った生徒の理解がなければ授業内容としては厳しいものになるだろう。	練習やアドバイスを、模範を始める前に、ボールを全員に取ってもらって前でも構わないので事前約束をしておくことが必要だろう。約束とは、「集合の際はボールをつかかない」「先生が模範を行う際はしっかりと観察し話を聞き、ボールには触れない」などのルールを決めていた方が一体感も生まれ、説明の流れも一気にスムーズになるだろう。	時間の関係上、生徒とコミュニケーションを取れる時間が少なかったり、特定の生徒としか話すことができなかったりといった状況だったので、他のグループの生徒にも明るく前向きなアプローチや声掛けを行うべきだと感じた。

資料3 バasketボール:リフレクションレポート例② 13/15回作成

<模擬授業を行ってみてand 模擬授業を受講して、全体を通しての感想>

初めての模擬授業を担当して、時間配分の大切さと事前準備、安全面の配慮に関して特に改めて重要性を感じた。自分の専門種目とコーチングをした経験はあるものの、全く経験ない球技を教えるという難しさ、思わぬアクシデント「時間的な」が起きたときの対処、全体を見ながらもアクシデント「事故的な」が起こらぬように注意深く観察しておく必要がある。今回の授業でメガネをかけた生徒が事故になりかけたこともあり、目的だけを優先して考えてしまうと危険であるということを実感した。時間配分も多めに考えておくほうがよく、H 中学校では集合や整列でのタイムロスが最小限なためこちら側がスムーズに授業展開ができていたシーンもあったと感じた。他の中学校、高等学校ではここまでタイムロスの少ない学校はなかなかないと思うので、集合や整列は必要な時に、必要最低限のポイントだけを説明することがベストだと感じた。そして、実技での最初の授業の導入にあたり、音楽をかける、楽しい話題に触れながらのコミュニケーションは、生徒の今から始まる授業に向けて積極的に取り組む気持ちの動機づけとしてよいものひとつであると感じた。全体的に相変わらず声の問題は減らないものの、雰囲気、授業の流れ、時間配分としてはまずまずの感触だった。先生役の私自身楽しく感じられたシーンも多くあったので、今後は課題店の声、話し方に気をつけ、さらに良い授業を展開できるように努力していきたい。また、指導案や単元構造図の作成なども、もっとわかりやすく、生徒のレベルにあったものを選択できるよう試行錯誤、創意工夫をしていき適切な授業の教材を選択し、自己の実践レベルを高めていきたい。

資料3 バスケットボール:リフレクションレポート例③ 13/15回作成

バスケットボール リフレクション・シート 本時のねらい ≪関心・意欲・態度②≫仲間の学習を援助しようとしている。【観察】（6/20時間） ① 本時のねらいを理解し、そのねらいに向けて取り組むことができたか。 （ 理解の状況、指導場面での働きかけ、教材や介入の修正等について振り返る）		
自身の取り組みでよかった点、達成できた点 ・5分間という限られた時間の中で、授業内容をまとめ発問や応答といったコミュニケーション、自主的発言を促すことができた。要点をまとめることもでき、「球技共通の楽しさ」「グループワークで積極的に発言、協力できたかの質問」「今回の授業の感想」を盛り込むことができた。 ・授業序盤のランニングでアドリブではあったが、生徒や授業の雰囲気を感じ取り、次のプログラムへ引き継ぐことができた。	修正すべき点 ・5分間の中でまとめられたものの、学習カードを記入してもらいその授業内に提出するという流れにはもっていきることができなかった。カードを配るタイミング、記入してもらったタイミング、自分が話すタイミング、話す時間など、実践を通し経験を工夫していきうえこの繊細ながらも重要な「タイミング」と「時間の使い方」をうまく操れるようになっていきたい。 ・指導案や単元構造図をまだうまくきれいに簡潔に書くこともまとめられることもできなかったため、今後の活動では一人でもある程度こなせるように段階的にでもその能力を獲得し、次に生かせるよう努めたい。	次回の対応策 ・実際は一人で授業1コマをこなさなければならず、今まで以上にプレッシャーや見られているという意識が強く、感じたことのない異質の重圧の中しばらく教育実習などで授業を展開することになると考えられる。その中でも堂々と授業を展開できるほどの自信と、トーク力に身に着けていきたい。 ・安全面の配慮として、全体を見るという意識を強く持ち、かといって何気なく全体を見渡すのではなく、できていない生徒に対してどう接してアドバイスをすればよいか、生徒によって接し方や指導の仕方はさまざまあるので、より多くの実践の中で「対応力」も磨いていきたい。
② 指導の計画へのリフレクション 次ページの当時の計画と実際の授業のずれを振り返って検証してください。 計画と実際で異なった点 ・模範演技をすべて成功させることができなかった。 ・模範演技や説明時間も短く少なかったため、生徒が理解しているのかを確認できずに授業が進んでしまっていた。 ・グループワークの時間が1分から3分に変わりまとめた時間が5分間となった。	ずれなどのように対応できたか、できなかったか。 ・模範演技要員が自分だけではなかった他のメンバーが成功していたのでよかったものの、視覚的記憶とイメージを必要とする場面のミスだったので、生徒には申し訳ないことをしてしまったりと感じた。 ・授業の中で随時アドバイスをできていない子を指導していくことで若干は説明模範演技不足を補うことはできたかとは思ったが、合格ラインとは言えないだろう。 ・5分間でうまくまとめられたのはいいものの、最後の学習カード記入と提出が間に合わなかった。HR後に担当の先生へ提出してもらおうようアナウンスし、その後その担当の先生から学習カードを預かるという流れで無事授業は終了したが、決してベストとは言えない最後だった。	次回の対応策（計画の修正、自身の修正） 私としては、まとめ方をもう少し工夫し方々に気を付けることがまず一つ。そして、わかりやすい模範演技を行うことが二つ目。そして、修正として、ゴールしても1点、リングにあたって1点と、ゲームレベルを落としながらそれが裏目となり、入れても入れなくても同じなら当てただけあてて早く回ればいいというあてはならない考えを引き出させてしまった。これでは、このような考えに生徒がなってしまうも不思議ではないので、入ったら2点、入らなくてもリングに当たれば1点とした方が、生徒の意欲も上がり、積極的にもなり、グループワーク時のコミュニケーションも活発になったのではと感じた。